

平成 27 年度

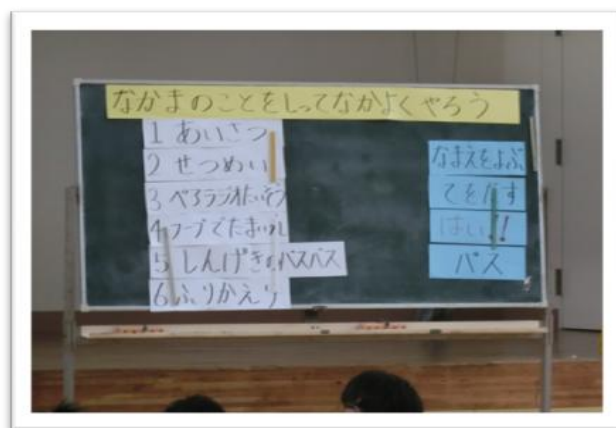
体育センター長期研修研究報告

人間関係形成能力の育成に着目した

球技：ゴール型の授業

—特別支援学校知的障害教育部門高等部における

ソーシャルスキルトレーニング（SST）の活用—



神奈川県立体育センター

長期研究員

藤沢養護学校 河手 拓哉

目次

第1章 研究を進めるにあたって

1 研究主題	1
2 主題設定の理由	1
3 研究の目的	2
4 研究の仮説	2
5 研究の内容と方法	2
6 研究の構想図	3

第2章 理論の研究

1 研究の背景	4
2 概念定義	14
3 使用用語の整理	17

第3章 検証授業

1 研究の仮説と検証の方法	18
2 学習指導計画	20
3 授業の実際	35
4 検証授業の結果と考察	51
5 学習指導の工夫とその効果及び課題	68

第4章 研究のまとめ

1 研究の成果と課題	72
2 今後の展望	74
3 最後に	74
【引用文献・参考文献】	76

第1章 研究を進めるにあたって

1 研究主題

人間関係形成能力の育成に着目した球技：ゴール型の授業
—特別支援学校知的障害教育部門高等部における

ソーシャルスキルトレーニング（SST）の活用—

2 主題設定の理由

厚生労働省は、知的障害者の3年以内の離職率（再就職者を含む）はおよそ4割であると報告している。¹⁾ また、中嶋は、離職理由として一番多かったのは「本人の問題」であり、さらにその内訳を見てみると、「人間関係」に関連する回答が一番多いと述べている。²⁾ このようなことは、藤沢養護学校高等部の進路担当者からの聞き取り調査においても、同様であった。さらに、東京都教育委員会は、「進路担当が就職の決め手と考えた能力はキャリア教育の4能力（人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力）と業務遂行能力、業務態度のうち『人間関係形成能力（自他の理解能力とコミュニケーション能力）』が60%と群を抜いて多かった」³⁾ と報告している。このように、生徒達は、さまざまな障害の特性から、対人関係課題に直面する場合があります、トラブルが生じたり、自然な接し方ができなかつたりすることがある。生徒達が、自ら社会生活を送るためには、自立活動はもとより教育活動全体を通して人間関係を構築できるように指導していくことが求められる。

近年、他者と上手にコミュニケーションをとるための知識と技術である⁴⁾ ソーシャルスキルを獲得する困難さを軽減・克服するための支援方法として、対人行動を習得する練習である「ソーシャルスキルトレーニング（以下、「SST」という）」が注目され、特別支援学校の様々な教育活動の場面で活用されている。⁵⁾ しかしながら、現在の特別支援学校の体育・保健体育科の授業について、渡邊らは、「仲間意識や、コミュニケーション能力の育成をねらいとした『集団的スポーツ』が最も重要とされながらも、実際の授業は長距離走、体操といった個人的スポーツが多いこと、集団的スポーツの代表である球技については指導の困難さがみられる」⁶⁾ ことを指摘している。つまり、多くの特別支援学校の体育の授業は、個々の運動能力の向上には有効であるが、集団で行う運動への取組が敬遠されがちなため、仲間意識の高まりなどといった本来の運動の持つ楽しさを味わわせることができていないと言える。

藤沢養護学校高等部においても、集団的スポーツについては、障害の特性に応じたグループ分けによる指導を中心に行っており、学年全員で同じ種目を同じ空間で行うことは難しいとしている。そのため、特定の友達同士の仲間意識しか芽生えず、本来、学校という組織の中で学ぶべき、仲間意識やコミュニケーション能力の育成が十分に図られているとは言えないと考える。

特別支援学校の体育の授業においては、より良い人間関係を築くための指導が大切としながらも、技能を習得させることが中心になり、仲間同士の豊かなかわり合いを育てるための具体的な支援が十分ではなかったのではないかと考える。特に集団的スポーツである球技では、個々の運動能力に大きな差があるため、どの指導内容に焦点を当てたらよいか、また、ルール等を理解させる難しさなどを解決するための指導をどのように行なったらよいか等、考えていく必要がある。

そこで、本研究では、個々の人間関係形成能力の課題を踏まえ、SSTを活用した授業及び役割分担を明確にした球技：ゴール型のゲームを展開することで、学年全員で同じ種目を同じ空間で行うことが可能となり、友達と協力して運動する態度やコミュニケーションを必要とするパスの技能を向上することができると考え、本主題を設定した。

3 研究の目的

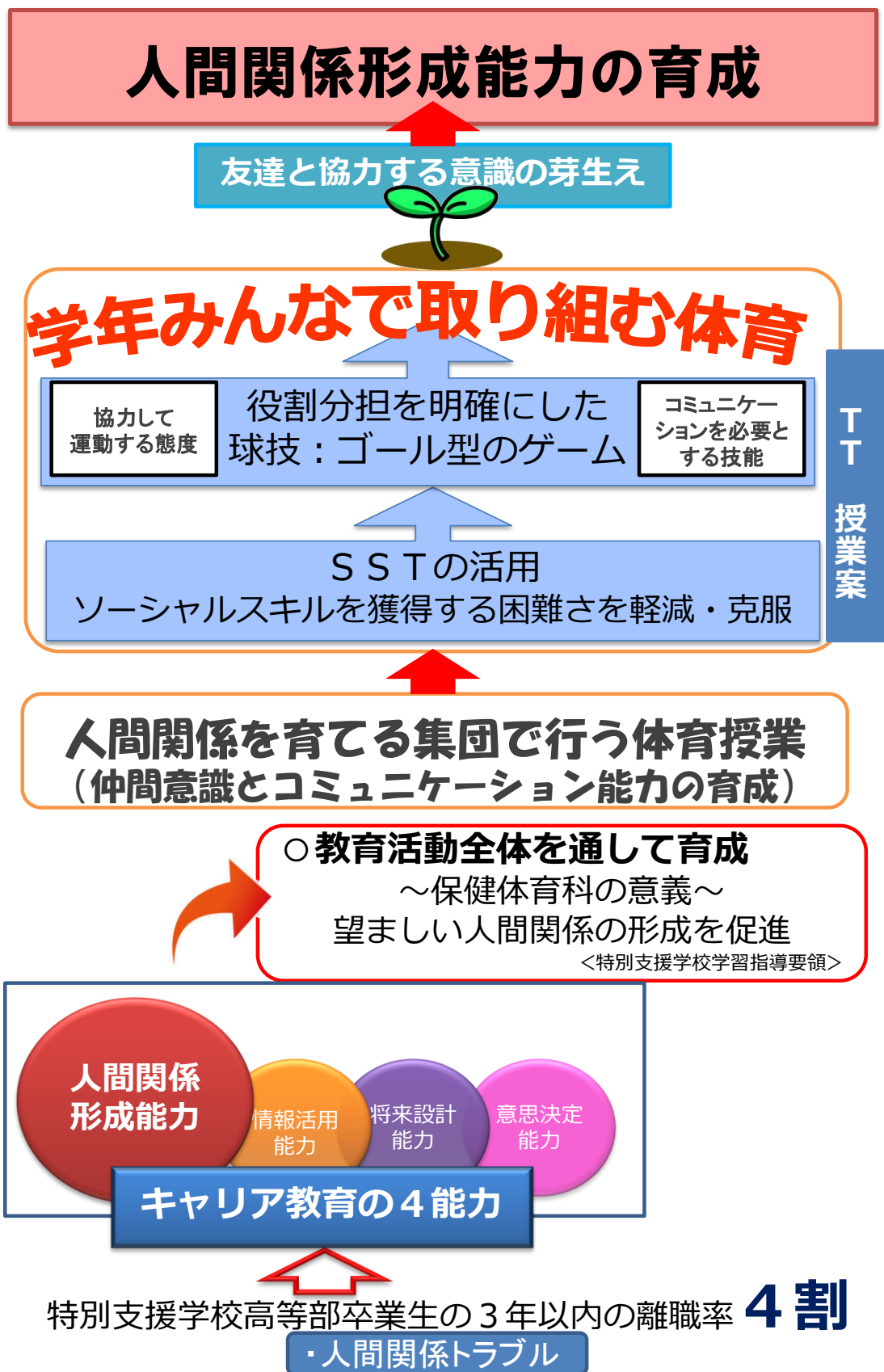
SSTを活用した体育の授業を通して、人間関係形成能力の育成に着目した集団的スポーツを学ぶ体育授業をつくる。

4 研究の仮説

個々の人間関係形成能力の課題を踏まえ、SSTを活用した授業及び役割分担を明確にした球技：ゴール型のゲームを展開することで、学年全員で同じ種目を同じ空間で行うことが可能となり、友達と協力して運動する態度やコミュニケーションを必要とするパスの技能を向上することができるであろう。

5 研究の内容と方法

- (1) 授業実践に先立ち、文献等により理論研究を行う。
- (2) 理論研究を基にした指導計画により授業実践を行い、仮説の検証を行う。
- (3) 理論研究と授業実践を基に研究をまとめ、授業モデルを提案する。



第2章 理論の研究

1 研究の背景

(1) 人間関係形成能力について

ア キャリア教育とは

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育⁷⁾

中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（平成 23 年 1 月 31 日）抜粋

イ 知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の定義

児童・生徒の実態に応じて、労働や 就職・就労のみにとらわれず、自分でやれることを増やしていこうとする態度・意欲（勤労観）をはぐくみ、自らの生き方を主体的に考え、進路を適切に選択できる能力・態度（職業観）を障害の特性や発達段階に応じて育成する教育のこと。³⁾

ウ 具体的な能力・態度

国立教育政策研究所生徒指導研究センターでは、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」を開発し、将来自立した人として生きていくために必要な具体的な能力や態度を構造化し、例として示した。同学習プログラムでは、その枠組みの基本的な軸として、「人間関係形成能力」、「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」の4つの能力領域を挙げている。³⁾

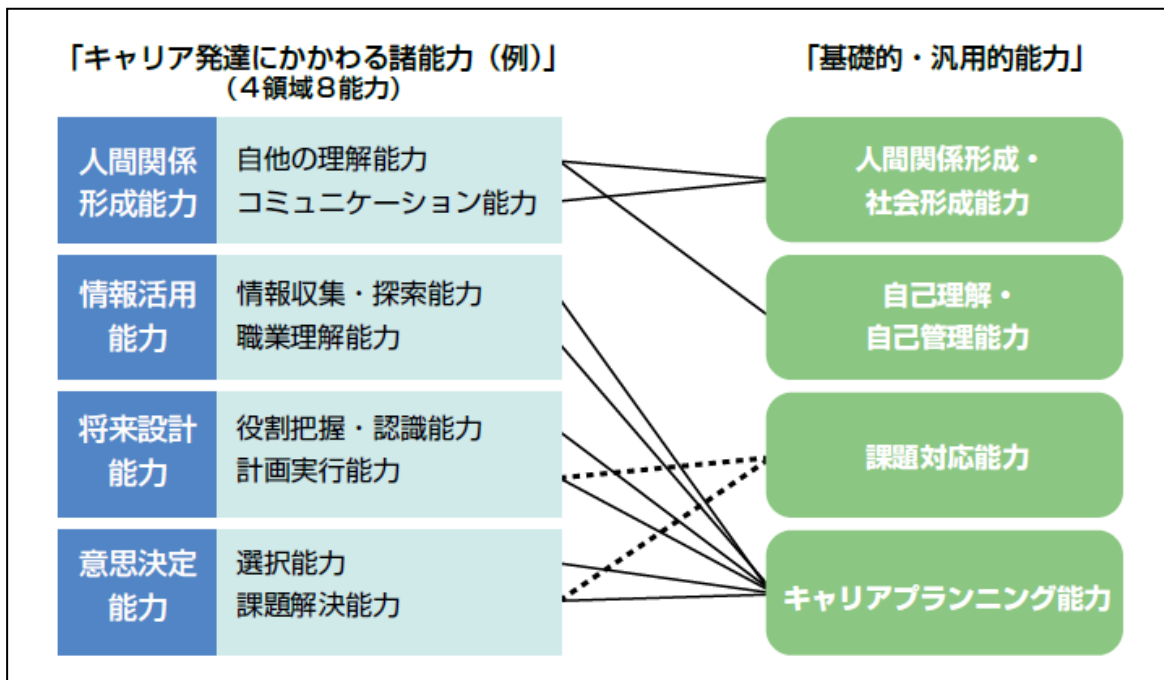


図2-1 社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度⁸⁾

エ 人間関係形成能力とは

文部科学省は次のように示している。「人間関係形成・社会形成能力」は、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力である。この能力は、社会との

かかわりの中で生活し仕事をしていく上で、基礎となる能力である。(中略)さらに、人や社会とのかかわりは、自分に必要な知識や技能、能力、態度を気付かせてくれるものでもあり、自らを育成する上でも影響を与えるものである。具体的な要素としては、例えば、他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等が挙げられる。⁸⁾

オ 特別支援学校知的障害教育部門高等部における人間関係形成能力育成の必要性

東京都教育委員会発行の「知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の推進」によると、平成19年度東京都知的障害特別支援学校高等部卒業生のうち、企業就労した生徒について、どの能力が就職の決め手となったのか、各校の進路指導担当者に上位3つを尋ねるアンケートを行った結果、企業就労の決め手となったのは、キャリア教育で育てる力の4領域が全体の86%と高い割合になっている。特にその中でも人間関係形成能力は60%である。人間関係形成能力は、小学部、中学部、高等部を通じてすべての場面で課題として取り込まれるもので、就労のみならず、社会生活全般に求められる力であると指摘している。³⁾

これらのことから本研究では、人間関係形成能力を「自他の理解能力」と「コミュニケーション能力」と定義づけ、個々の人間関係形成能力の課題を踏まえ、体育授業を展開することとした。

(2) 特別支援学校学習指導要領解説総則編(高等部)における特別支援学校知的障害教育部門の保健体育の位置付け(一部抜粋)

ア 保健体育科の意義⁹⁾

高等部の保健体育科では、中学部の発展段階として、運動領域を更に広げるとともに、将来の余暇活動も視野に入れた適切な運動の経験や健康・安全についての理解を通して、心身の調和的発達を図り、明るく豊かな生活を営む態度と習慣を育てることを目標としていることが特徴である。保健体育科で取り扱う内容としては、体づくり運動、スポーツ、武道、ダンス及び保健がある。

運動を実践していくことは、運動技能を高めるばかりでなく、生活への積極的な態度も養い、望ましい人間関係の形成を促進することになる。また、体育指導によって獲得される行動様式は、健康かつ安全で自律的な生活を営む習慣形成につながるものである。さらに、余暇活動に対する積極的な態度の育成を図り、より豊かな生活を営むような習慣を身に付けることが大切である。

イ 目標⁹⁾

適切な運動の経験や健康・安全についての理解を通して、心身の調和的発達を図り、明るく豊かな生活を営む態度と習慣を育てる。

「明るく豊かな生活を営む態度と習慣を育てる。」とは、様々な運動経験や健康・安全に関する知識や技能などを身に付けることによって、日々の生活が充実し、生活に張り合いをもち、余暇活動を充実することである。特に、高等部段階では、集団生活に積極的に参加するため、基本的な運動ばかりでなく、レクリエーション的なスポーツに関する指導も大切である。

なお、高等部段階では、特に、生徒の運動能力の差が著しくなるため、個人差に十分に配慮し、安全に注意して指導する必要がある。

ウ 内容⁹⁾

内容は、「いろいろな運動」、「きまり」及び「保健」の3つの観点から基礎的な内容と発展的な内容の2段階で示している。

1段階(1) 体づくり運動、いろいろなスポーツ、ダンスなどの運動をする。
2段階(1) 体づくり運動、いろいろなスポーツ、ダンスなどの運動を通して、体力や技能を高める。

1段階(1)の球技では、フットベースボール、ソフトボール、サッカー、バスケットボール、ユニバーサルホッケーなどを扱うが、例えば、フットベースボールの指導の前にワンベースボールを、ソフトボールの指導の前にティーボールを、サッカーの指導の前にラインサッカーの指導を取り入れるなどして、基本的なルールや初歩的な運動技能を、段階的に指導することが大切である。また、守備に就く生徒の人数を多くするなど、生徒の実態に適したルールを工夫して、生徒が楽しくスポーツに参加できるようにすることも大切である。さらに、ボッチャやフライングディスクなど、将来の余暇活動に結び付く種目に楽しく参加できるようにすることも大切である。

2段階(1)の球技では、バスケットボール、ハンドボール、バレーボール、卓球、バドミントンなどがあるが、例えば、バレーボールでは、ビーチボールを使用し、ネットを低くするとともに、ボールに3回以上触れてもよいなどのルールを工夫してラリーが続くようにするなど、生徒がゲームを楽しめるようにすることが大切である。また、ボッチャやフライングディスクなど、将来の余暇活動に結び付く種目を取り入れることも必要である。

1段階(2) きまりやいろいろなスポーツのルールなどを守り、友達と協力して安全に運動をする。
2段階(2) きまりやいろいろなスポーツのルールなどを守り、友達と協力し、進んで安全に運動をする。

今回の改訂では、1段階(2)について、従前の「きまりやいろいろなスポーツのルールなどを守り、互いに協力し、安全に運動をする。」を、中学部の内容を考慮するとともに、具体的な指導内容が設定できるようにする視点から、後半部分を「友達と協力して安全に運動をする。」と改めた。

また、2段階(2)について、従前の後半部分「互いに協力し、進んで安全に運動をする。」を、同様に「友達と協力し、進んで安全に運動をする。」と改めた。

「スポーツのルールなど」とは、ルールのほか、水泳の「心得」を指している。

1段階(2)では、運動を行う際の環境整備、器械や器具、施設の正しい扱い方と運動の方法を理解し、技能を身に付けることを指している。適切な運動経験を通して、運動の仕方、規則等を学習し、仲間意識や集団意識を育て、ルールや規則を守り、自主的に活動に参加できるようにすることが大切である。

2段階(2)では、スポーツの種類増加に従い、それぞれの正規のルールを覚え、ルールを守って運動すること、運動に必要な用具を自主的に準備したり片付けたりすること、チームゲームでは各自の役割を話し合っ決めて、作戦を立てて、それに沿ってゲームを進めたりすることなど、友達と協力して積極的に活動することを内容としている。

本研究では、学習指導要領に示されている内容の「いろいろな運動」の中の球技に着目し、生徒の実態に合わせてルールを工夫し、生徒がゲームを楽しめるようにすることとした。また、「きまり」の指導内容に重点を置き、1段階では「コミュニケーション能力」の観点から仲間意識や集団意識を育てること、2段階では「自他の理解能力」の観点から友達と協力して積極的に活動することに着目して授業を展開することで、目標の実現に努め、保健体育

科の意義である「生活への積極的な態度も養い、望ましい人間関係の形成を促進する」を目指し、人間関係形成能力の育成が可能な教科の一つとしての保健体育授業の充実を図っていくこととした。

(3) 学習指導要領解説に示されたボール運動及び球技の指導内容について (抜粋)

表2-1 (1) 指導内容の体系化整理表「ゲーム及びボール運動」 球技 (ゴール型) の内容の体系化¹⁰⁾ <技能 (パス) 及び態度 (友達と協力) >

		第1学年及び第2学年の目標及び内容	第3学年及び第4学年の目標及び内容
技能	内容	ボールゲームでは、簡単なボール操作やボールを持たないときの動きによって、的に当てるゲームや攻めと守りのあるゲームをすること。	ゴール型ゲームでは、基本的なボール操作やボールを持たないときの動きによって、易しいゲームをすること。
	ボール操作	<ボール遊び> ・大小、弾む・弾まないなど、いろいろなボールで、つく、転がす、投げる、当てる、捕る、蹴る、止めるなどの簡単なボール操作をすること。	・味方にボールを手渡したり、パスを出したりすること。
	ボールの動きを保持		・向かってくるボールの正面に移動すること。 ・ボール保持者と自分の間に守備者がいないように移動すること。
態度	内容	(2) 運動に進んで取り組み、きまりを守り仲よく運動をしたり、勝敗を受け入れたり、場の安全に気を付けたりすることができるようにする。	(2) 運動に進んで取り組み、規則を守り仲よく運動をしたり、勝敗を受け入れたり、場や用具の安全に気を付けたりすることができるようにする。
	公正	運動の順番やきまりを守り、友達と仲よくゲームをすること。	規則を守り、友達と励まし合って練習やゲームをしたり、ゲームの勝敗の結果を受け入れたりすること。
	協力	用具の準備や片付けを、友達と一緒にすること。	規則を守り、友達と励まし合って練習やゲームをしたり、ゲームの勝敗の結果を受け入れること。 用具の準備や片付けを、友達と一緒にすること。
	責任	用具の準備や片付けを、友達と一緒にすること。	用具の準備や片付けを友達と一緒にすること。
	参画		

表2—1 (2) 指導内容の体系化整理表「ゲーム及びボール運動」 球技（ゴール型）
の内容の体系化¹⁰⁾ <技能（パス）及び態度（友達と協力）>

		第5学年及び第6学年	1学年・2学年
技能	内容	ゴール型では、簡易化されたゲームで、ボール操作やボールを受けるための動きによって、攻防をすること。	ゴール型では、ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防を展開すること。
	ボール操作	・近くにいるフリーの味方にパスを出すこと。	・マークされていない味方にパスを出すこと。 ・得点しやすい空間にいる味方にパスを出すこと。
	ボールを保持するときの動き	・ボールを保持する人と自分の間に守備者を入れないように立つこと。	・パスを受けるために、ゴール前の空いている場所に動くこと。
態度	内容	(2) 運動に進んで取り組み、ルールを守り助け合って運動をしたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができるようにする。	球技に積極的に取り組むとともに、フェアなプレイを守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすること、作戦などについての話し合いに参加しようとするなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。
	公正	ルールやマナーを守り、友達と助け合って練習やゲームをすること。	「フェアなプレイを守ろうとする」とは、球技は、チームや個人で勝敗を競う特徴があるので、規定の範囲で勝敗を競うといったルールや相手を尊重するといったマナーを守ったり、相手の健闘を認めたりして、フェアなプレイに取り組もうとすることを示している。そのため、ルールやマナーを守ることで球技独自の楽しさや安全性、公平性が確保されること、また、相手や仲間の素晴らしいプレイやフェアなプレイを認めることで、お互いを尊重する気持ちが強くなることなどを理解し、取り組めるようにする。
	協力	ルールやマナーを守り、友達と助け合って練習やゲームをすること。	「～など」の例には、仲間の学習を援助しようとするところがある。これは、練習の際に、球出しなどの補助をしたり、チームの作戦や戦術などの学習課題の解決に向けて仲間に助言したりすることなどを示している。そのため、仲間の学習を援助することは、自己の能力を高めたり、仲間との連帯感を高めて気持ちよく活動することにつながることを理解し、取り組めるようにする。
	責任	用具の準備や片付けで、分担された役割を果たすこと。	「分担した役割を果たそうとする」とは、練習やゲームの際に、用具の準備や後片付け、記録や審判などの分担した役割に積極的に取り組もうとすることを示している。そのため、分担した役割を果たすことは、練習やゲームを円滑に進めることにつながることや、さらには、社会生活を過ごす上で必要な責任感を育てることにつながることを理解し、取り組めるようにする。
	参画		「話し合いに参加しようとする」とは、チームなどの課題の解決に向けて、自らの考えを述べるなど積極的に話し合いに参加しようとするところを示している。そのため、チームの作戦などについて意思決定をする際には、話し合いを通して、仲間の意見を聞くだけでなく自分の意見も述べるなど、それぞれの考えを伝え合うことが大切であることを理解し、取り組めるようにする。

表2—1 (3) 指導内容の体系化整理表「ゲーム及びボール運動」 球技（ゴール型）
の内容の体系化¹⁰⁾ <技能（パス）及び態度（友達と協力）>

		[第3 学年][入学年次]	その次の年次以降
技能	内容	ゴール型では、安定したボール操作と空間を作りだすなどの動きによってゴール前への侵入などから攻防を展開すること。	ゴール型では、状況に応じたボール操作と空間を埋めるなどの連携した動きによって空間への侵入などから攻防を展開すること。
	ボール操作	・味方が操作しやすいパスを送ること。	・味方が作りだした空間にパスを送ること。
	ボールを保持するときの動き	・パスを出した後に次のパスを受ける動きをすること。	・シュートやトライをしたり、パスを受けたりするために味方が作りだした空間に移動すること。
態度	内容	球技に自主的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとする、自己の責任を果たそうとすること、作戦などについての話し合いに貢献しようとするなどや、健康・安全を確保することができるようにする。	球技に主体的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとする、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、合意形成に貢献しようとするなどや、健康・安全を確保することができるようにする。
	公正	「フェアなプレイを大切にしようとする」とは、決められたルールやマナーを単に守るだけではなく、練習やゲームで求められるフェアな行動を通して、相手を尊重するなどのフェアなプレイを大切にしようとするを示している。そのため、ルールやマナーを大切にすることは、友情を深めたり連帯感を高めたりするなど、生涯にわたって運動を継続するための重要な要素となることを理解し、取り組めるようにする。	「フェアなプレイを大切にしようとする」とは、主体的な学習の段階では、決められたルールや自分たちで決めたルール、マナーを単に守るだけではなく、練習やゲームで相手の素晴らしいプレイを認めたり、相手を尊重したりするなどの行動を通して、フェアなプレイを大切にしようとするを示している。そのため、ルールやマナーを大切にすることは、スポーツの価値を高めるとともに、自己形成に役立つことを理解し、取り組めるようにする。
	協力	「～など」の例には、互いに助け合い教え合おうとすることがある。これは、練習の際、互いに練習相手になったり、仲間に助言したりして取り組もうとすることを示している。そのため、互いに助け合い教え合うことは、相互の信頼関係を深めたり、課題の解決に役立つなど自主的な学習を行いやすくなり、取り組めるようにする。	「～など」の例には、互いに助け合い高め合おうとすることがある。これは、仲間や他のチームと互いに練習相手になったり、運動観察を通して仲間の課題を指摘したり、課題解決のアイデアを伝え合ったりしながら取り組もうとすることを示している。そのため、互いに助け合い高め合うことは、安全を確保し事故を未然に防ぐことや課題の解決に向けて自分で計画を立てて活動するなど主体的な学習を行いやすくなり、共通の目標に向けて共に切磋琢磨する仲間をもつことが、自らの運動の継続に有効であることなどを理解し、取り組めるようにする。
	責任	「自己の責任を果たそうとする」とは、練習や試合の進行などで、記録や審判、キャプテンなどの仲間と互いに合意した役割に、責任をもって自主的に取り組もうとすることを示している。そのため、自己の責任を果たすことは、活動時間の確保につながることでチーム内の人間関係が良くなること、自主的な学習が成立することを理解し、取り組めるようにする。	「役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとする」とは、練習やゲームの際に、記録や審判、キャプテンなどの役割を積極的に引き受け、責任をもって主体的に取り組もうとすることを示している。そのため、主体的な学習が成立するには、仲間と活動を行う上で必要な役割を作ること、決めた役割に対して、責任をもって分担すること、グループで果たすべき責任が生じた場合には、積極的に引き受ける姿勢が求められることを理解し、取り組めるようにする。
	参画	「話し合いに貢献しようとする」とは、チームの課題の解決に向けて、自己の考えを述べたり、相手の話を聞いたりするなど、チームの話し合いに責任をもってかかわろうとすることを示している。そのため、相互の信頼関係を深めるためには、相手の感情に配慮しながら発言したり、提案者の発言に同意したりして話し合いを進めることなどが大切であることを理解し、取り組めるようにする。	「合意形成に貢献しようとする」とは、チームや自己の課題の解決に向けて、自己の考えを述べたり、相手の話を聞いたりするなど、チームの話し合いに責任をもってかかわろうとすることを示している。そのため、相互の信頼関係を高めるためには、相手の感情を尊重しながら発言したり、提案者の発言を尊重したり、建設的な修正意見を提案しながら話し合いを進めることなどが大切であることを理解し、取り組めるようにする。

本研究では、学習指導要領解説に示された球技：ゴール型の技能および態度の指導内容の体系化に生徒の発達段階を踏まえて、指導計画を作成していくこととした。

(4) 知的障害とは¹¹⁾

知的障害とは、先天性または出生時などに、脳になんらかの障害を受けたために知的な発達が遅れ、他人とのコミュニケーションなどの社会生活に困難が生じる障害である。

支援を必要としていても社会で活躍されている方もいる。また多くの支援を必要としない方も大勢いる。

<主な特徴>

- 話の内容を理解できなかつたり、自分の考えや気持ちを表現することが難しく、コミュニケーションを上手にとれないことがある。
- 複雑な話や抽象的な概念の理解が不得手な人もいる。
- 判断したり、見通しをもって考えることが苦手な人もいる。
- 読み書きや計算が苦手な人もいる。
- 困ったことが起きても自分から助けを求めることができない人もいる。

これらのことから、藤沢養護学校高等部の生徒たちも対人関係の課題を抱えていると考え、社会性についてのアセスメントを実施した上で、個々の人間関係形成能力の課題を把握し、コミュニケーション能力の育成に向けた指導の充実を図ることとした。

(5) 特別支援学校における球技の指導の困難さについて

渡邊らは、「特別支援学校における体育の教育課程に関する調査研究」の中で、「『保健体育の単元の目標やねらいが達成されない理由』として球技指導の困難さについての記述（例えば「用具を使って運動する事による身体のバランス、集団行動など学ぶべき要素も多いので取り入れるが、子どもの運動能力差の幅が大きくどこに焦点を当てたら良いのか分からない」等）が見られた。その意味では、『投げる・捕る』といった球技に必要な運動技能を身につけるための遊びや指導を低年齢段階から行っていくことや、それらの指導方法についても今後十分検討していく必要があるといえる。以上、特別支援学校の保健体育科の授業は児童・生徒の「体づくり」や「動きづくり」といった個々の身体面の発達を促すための指導が重視され、学部を問わず十分な時間をかけ取り組まれている。また卒業後の余暇を充実させ、生活を豊かにしていくためにも、仲間と一緒に運動することを楽しむ経験も積み重ねていきたい。ところが、集団的スポーツの代表である球技については指導の困難さがみられることから、その指導方法については十分検討していく必要がある³⁾と述べている。

国立特別支援教育総合研究所では、「小・中学校等における発達障害のある子どもへの教科教育等の支援に関する研究」¹²⁾において、発達障害のある子どもにはどのような学習の難しさがあるのか現状を把握するために、小学校、中学校の通常の学級の担任及び教科担任に対し、聞き取り調査及びアンケート調査を実施している。そのアンケートの中の体育、保健体育に関して、球技に関連のあるものの結果は次のとおりである。（抜粋）

- 見通しを持ち、計画的に作業を進めることが難しい
- ルールを守って球技ができない
- ゲームのルール理解が難しい
- ボール運動（ドリブル、ねらったところに投げる、受け取る、蹴る）が難しい
- 場や用具の安全に気をつけることへの意識が弱い
- ゲームの勝敗を受け入れることが難しい
- 仲間との連携した動きが難しい

吉田は「ボール操作における不器用さは、大きく分けて『動作』と『認知』の2つの側面にある。前者はボール操作の動作そのものが不器用であること。後者は主にボールゲームにおいて、ボール操作に先行して周囲の状況を的確に認識・判断し、その後続くボール操作を合理的に実行するための時間的空間的な準備を行う心理的な働きである。このような認知的不具合は、よほど指導内容に精通した指導者でなければ、問題点を見抜き改善策を提示することは難しいと思われる。」¹³⁾と述べている。

(6) ソーシャルスキルトレーニング (SST) とは

「ソーシャルスキル」とは 対人関係や集団行動を上手に営んでいくための技能(スキル)のことである。言い換えれば、対人場面において、相手に適切に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動のことで、その対人行動を習得する練習のことを「ソーシャルスキルトレーニング」という。

ア ソーシャルスキル

岩手県総合教育センターから出されている、「ソーシャルスキルトレーニングの理解と指導」では、「ソーシャルは『人間関係に関すること』を意味し、スキルは『知識や経験に裏打ちされてきた技術』を意味します。心理学では、ソーシャルスキルを『他者との良好な関係を形成し、それを維持していくための知識や技術の総称』とし、環境や学習によって変化するもの」¹⁴⁾としている。

イ ソーシャルスキルの必要性

同センターは、ソーシャルスキルの指導の必要性について「発達障害をもつ児童生徒の多くは、ソーシャルスキルの『学び損ない』『誤学習』『学べない』という課題を抱えています。したがって、ソーシャルスキルの指導を行っていくことが必要です。」¹⁵⁾と述べている。

また、上野ら(2015)は、「ソーシャルスキルを具体的に『やり方』や『コツ』として教えることで、子どもたちの生活をより豊かになるように支援するのがソーシャルスキル指導」¹⁵⁾と述べている。

ウ ソーシャルスキルトレーニングについて¹⁴⁾

ソーシャルスキルトレーニングには一般的に、「教示」「モデリング」「リハーサル」「フィードバック」「般化」というものがある。

(ア) 教示

教示とは、直接やり方を言葉や絵カードなどで教えることである。ADHD(注意欠陥/多動性障害)やHF-PDD(高機能広汎性発達障害)などの生徒には、口で言っただけでは効果がない時があるので、絵カード(視覚シンボル)や手順表などを用いて教えることが有効である。PDDなどの生徒は、当たり前となっている暗黙のルールに気づかないことが多々ある。あらかじめ、ルール表やお約束表などで「すべきこと」「してはいけないこと」を明確にして、教示しておくことが大切になる。

(イ) モデリング

モデリングには、仲間や教員の適切な振る舞い方を見せるというものと、単純な問題場面を見せ、どうすればよいか考えさせるというものがある。不適切なモデルも模倣してしまいやすいので、幼児や低学年は、なるべく適切な場面を見せるようにする。

(ウ) リハーサル

実際に練習してみることをリハーサルという。ソーシャルスキル指導では主に、教員や仲間を相手に模擬場面でやってみるといったロールプレイングの手法が用いられる。ただ、発達障害がある生徒の場合、模擬場面だけでの練習では、スキル定着と般化がうまくいかない。ゲームでの活動を通して練習したり、ワークシートを用いて練習したりと多層的にリハーサルを行う。中でも、ゲームでの活動を通して練習することをソーシャルスキルゲーム（以下、SSG）という。

(エ) フィードバック

生徒の行動をほめたり、「～してごらん」と修正を求めたりすることをフィードバックという。問題行動の後に、怒ったり注意したりすることもフィードバックになる。ただ「それはダメ」と否定的にするのではなく、効果的なフィードバックの方法は、指導者は落ち着いた態度で、肯定的にすることである。また、適切な行動が見られた場合、即時に評価してあげる、ただほめるのではなく、何についてほめたかを明示することも大事である。

(オ) 般化

ソーシャルスキルの指導では、指導場面ではスキルを発揮できるのに、実際の生活場面ではうまくいかないといった般化の問題がしばしば起こる。般化を促すために、本人を指導するだけでなく、本人を取り巻く環境へ働きかけることも必要になる。指導者がまず先にできることは、指導プログラムや生徒の目標を教員全員で共有することである。

エ ソーシャルスキル指導のポイント<ソーシャルスキル指導のポイント（活動型）>¹⁶⁾

活動型の指導とは、生徒たちが楽しめるゲームやアクティビティを中心に指導を組み立て、仲間関係をつくり深めていくことを目的とした指導方法である。積極的にスキルを教えるというよりも、仲間関係をつくること、グループ活動に楽しく参加すること、成功体験をもとにスキルを学ぶことに重点が置かれる。また、仲間に関われない生徒がいる場合は、「活動型の指導」で仲間との相互交渉を増やし、「仲間と遊んだり活動したりすることは心地よいこと」といった感覚を育てていく。

本研究では、SSTの手法（教示→モデリング→リハーサル→フィードバック→般化）を取り入れ、『動作』と『認知』を結びつける、例えば、「名前を呼ぶ」「名前を呼ばれたら返事をする」といったスキルは、対人意識が薄く、人とのかかわりが不器用な生徒たちにとっては、つまずきやすいスキルであり、これを実際の場面を想定し、リハーサルを行い、実際のゲームの場面で活用することで、定着させていく。このような方法で、集団的スポーツの指導の困難さを軽減できる可能性を明らかにすることとした。

また、発達障害の有無にかかわらず、体育授業には、ソーシャルスキルの発揮を求められる場面が多くある。前述のように、発達障害を持つ生徒には、体育授業ではゲームでの活動がリハーサルとなり、ソーシャルスキルが定着するのではないかと考える。よって本研究では、SSTの手法を取り入れることで、コミュニケーション能力や自他理解を促進することを目指すこととした。

(7) 集団的スポーツを成立させるには

金らは「子どもの集団遊びを成立させるためには、特定の個人だけに楽しさが偏ってしまったりは集団を維持することはできないので、強い立場の子ども（能力が高いとか、年齢が高いなど）も弱い立場の子どもも楽しさを共有できるような方法を考案しなければならない。」また、「あるルールにしたがって遊ぶことは、いろいろな役割を演じることを可能にし、自

分の役割を自覚することにつながり、他者の立場を理解することにもつながる。」¹⁶⁾と述べている。

そこで、本研究ではゲーム中の生徒一人ひとりの役割分担を明確にして、自分の役割を自覚させるとともに、他者の立場が理解できるようにするため、運動能力等に大きな個人差がある学年集団においても全員で楽しさを感じることができるゲームを考案することとした。

2 概念定義

(1) 球技：ゴール型ゲーム（セストボール、ポートボール、タッチラグビー）について

ア セストボール

日本では、現行の学習指導要領にある「ボールを持たない時の動きの習得」に適しているとして、体育館で行う授業に導入する小学校が増えている。バスケットボールとは異なり、玉入れのように360度どの方向からもシュートが可能（コートの中に置いた支柱の高い位置にゴールとなるバスケットがある）。また、ドリブルは禁止でパス回しのみでゲームが行われる点も異なる。そのため、味方プレーヤー同士の会話（言語活動）などによるコミュニケーションも増え、運動が苦手な学童にもシュートの機会が与えられるという意見もある。ゴールエリア（支柱を中心とした円）の中には入れないなどの、ルールを設定することがある。¹⁷⁾

イ ポートボール

大阪府堺市発祥のポートボールとは、バスケットボール、タワーボールに似た球技で、7人制である。バスケットボールとの違いは、バスケットゴールの代わりにゴールマンが台の上に乗し、立ち、手でシュートを捕る。その下にゴールを阻止するためにゴール台を中心に半径2.5mの半円にガードマンが1人おり、ジャンプしながら相手のゴールを阻止する。24m×14mのコートを5人でボールを運びながらシュートする。1ゴールにつき2点が加算される。但し、フリースローは1点である。¹⁸⁾

ウ タッチラグビー

ラグビーで用いられるタックルを、より安全な「タッチ（後述）」に置き換えた、より親しみやすい簡易型フットボール。1960年代、オーストラリアでラグビーリーグ選手のウォームアップ用として始められたとされ、簡単な競技方法から、次第に競技人口が拡大していった。現在、オーストラリア（現地では主に「タッチ・フットィ（Touch Footy）」と呼ばれている）、ニュージーランドを始め、アメリカ、カナダ、欧州各国等で広く競技されている。通常のラグビーチームでも、ウォーミングアップ等の練習の一環としてこのようなルールで行われることも多く、広く親しまれている。¹⁹⁾

本研究では、簡易化されたルールで展開されるこれらのゲームを組み合わせ、藤沢養護学校高等部2学年の生徒が学年集団全員で取り組むことができる新たなゲームを考案することとした。

セストボールからは、ドリブルは禁止でパス回しのみでゲーム、ポートボールからは、ゴールの代わりにゴールマンがキャッチする得点方法、タッチラグビーからは、ボールを持って走ることを取り入れたゲームとすることとした。

(2) 社会性のアセスメント

ア 社会性とは

国立教育政策研究所生徒指導研究センターでは、学校教育で想定されている『社会性』とは、①集団活動の場で自分の役割や責任を果たす②互いの特性を認め合う③他者と協力して諸問題を話し合う④その解決に向けて思考・判断する等の能力や態度であり、⑤さらにはそれが自らの個性と統合され個人の資質として昇華されたものと指摘している。²⁰⁾

また、そのような「社会性」は、概ね次のような内容にまとめられ、学校での育成が図られている。

- ① 基本的な生活習慣
- ② 対人関係の在り方
- ③ 集団活動の体験
- ④ 規範意識の獲得
- ⑤ 社会生活の体験

イ ソーシャルスキルの内容とアセスメント

ソーシャルスキル指導においては、生徒の実態を把握することと、指導効果を測定することが重要である。

(ア) コミュニケーションの基礎的能力に係る評価シート

加地は、「知的障害のある児童生徒のコミュニケーションの力を育む指導の工夫—コミュニケーションの基礎的能力に係る評価シートの作成を通して—」において、コミュニケーションの基礎的能力の範囲を出生から6歳程度までの段階とし、「人間関係の形成」や「身体の動き」の項目などと関連付けた評価シートの作成及び活用を通して、その有効性を検証している。そして、その結果、「発達の順序性を踏まえた評価に基づく目標設定や指導内容の設定がしやすくなり、教師間で実態把握や指導の方向性の共有が図れること」や「コミュニケーションの基礎的能力を高める指導に有効であること」がわかっている。評価シートを作成するに当たり、加地は次の発達検査を参考にしている。

21)

- コミュニケーション発達段階表（新井英康、2014）
- 乳幼児と障害児の感覚運動発達アセスメント MEPA-II（小林芳文、1992）
- 学習到達度チェックリスト（徳永豊、2006）
- 新版S-M社会生活能力検査（三木安正、1980）
- カード式ポーターページ乳幼児教育プログラム（山口薫）

本研究ではこの加地が作成した「コミュニケーションの基礎的能力に係る評価シート」を使用し、生徒の人間関係形成能力と、コミュニケーション・スキルの発達段階のアセスメントを実施することとした。

表2-2 コミュニケーションの基礎的能力に係る評価シート

学部、学年、学級（部 年 組） 児童生徒氏名（ ）		コミュニケーションの基礎的能力に係る評価シート				評価日 年 月 日 評価者	
人間関係の形成に関する項目		コミュニケーションの基礎的能力				身体の動きに関する項目	
19	いつでも、どこでも、誰とでも活動できる	21	5～6歳	4語文で自分の経験を伝えたり、よく知っている話をしたりできる	19	行き慣れたところであれば一人で歩くことができる	
18	決められた役割を一人で果たすることができる	20	6歳	トーンキングエイドや平板名表を使って意思を伝えることができる	18	自分で鉛筆などを使い、名前（平仮名でもよい）や線がかけられる	
17	ルールを守って活動できる	19	3歳	3語文を使って、考えや出来事を人に伝えることができる	17	円や三角形など単純な形をはさみで切って貼ることができる	
16	必要に応じて誰かに援助を求めることができる	18	3歳6か月～4歳	短い時間であれば物語などを聞くことができる	16	相手やその集団に合わせて行動できる	
15	簡単な教師の指示や説明を聞いて行動できる	17	4歳	数字や平仮名の拾い読みができる（時計、絵本に書いてある文字などがいくつ分かる）	15	指示で起立・着席したり、姿勢を直したりできる	
14	いろいろな道具を使って友達と遊ぶことができる	16	4歳11か月	電話で簡単な応対ができる（電話が掛かってくるかと受話器を取って聲に取らぬこと、留守を掛けたりする）	14	正方形、三角形の型はめができる	
13	自分から教師や友達に動作や言葉（写真・カードなど）であいさつできる	15	5歳	見たり聞いたりしたことを自分から話せる（身近な出来事について説明することができる）	13	両脚踏み歩いたり置いたある大きなボールを蹴ったりすることができる	
12	自分の意思や要求を2語文で表現できる	14	2歳	自分の気持ちを表現で表すことができる	12	簡単な教師の動きを自ら模倣できる	
11	教師の指示があれば、順番を守ることができる	13	2歳～3歳	自分の姓と名を言える	11	指差しや言葉で使われると容器などに物を入れることができる	
10	声を掛けると「はい」などの返事をし応えることができる	12	3歳6か月	日常のあいさつができる（「おはよう」「ありがとう」など二つ以上正しく使える）	10	手元を見て型はめ（円型）などの動きができる	
9	1語文で要求できる	11	3歳	2語文を話す（「オント イク」「マンマ チョーダイ」など）	9	口を開けて飲んだり食べたりできる	
8	指差し、サイン、道具（写真・カードなど）を使って意思表示ができる	10	4歳	簡単な指示に応じることができる（「～を持ってきてちょうだい」「～の所へ行きなさい」などの指示に従える）	8	教師の意図的な身振りや言葉掛けに対してその意図に合った反応ができる	
7	意味のある単語を言うことができる	9	4歳～5歳	簡単な言葉を聞いて模倣できる	7	音が鳴るおもちゃなどを振ったり、鳴らしたりできる	
6	自分の働き掛けで周りの人や物などが動くことが分かる	8	4歳		6	欲しい物や興味のある物などをつかみ、持ち続けることができる	
5	特定の人（教師など）と一緒に活動できる	7	4歳	簡単な質問に身振りや答えることができる	5	自分でバランスを保ち、安定した姿勢がとれる	
4	「ちょうだい」と身振りをつけて言うと、ボールを転がすなど、教師に簡単なやりとりができる	6	5歳7か月～11か月	指差し、視線及び発声などを組み合わせて欲しい物などを要求する	4	道具・物などを親指と他の指で持ったり、放したりできる	
3	教師が微笑みながら指差した物などを見て微笑むことができる	5	4歳	教師が指差したおもちゃなどを見ることができる	3	教師に向かって発声できる	
2	呼名されたら声をかけられたりすると目を合わせることができる	4	4歳	1語文を話す（「ハイ」「ママ」「プー」「バイバイ」などの単語を2～3語話す） 名前を呼ばれると分かる（自分の名前を呼ばれるとその方へ顔を向ける）	2	目で対象を追うことができる	
1	近くにいる人を追視できる	3	3歳		1	興味のあるものを注視できる	
		2	出生～6か月	空腹や不安などに対して周りに訴えることができる			評価の仕方 ○：一人でできる △：支援があればできる ×：支援があっても難しい
		1	6か月	近くにいる人への手を伸ばしたり、微笑んだり、声を出したりすることができる			

(イ) ソーシャルスキル尺度¹⁴⁾

生徒の実態把握のため、また、指導効果の測定のため、チェック尺度を用いて生徒のソーシャルスキルの状態を評価していく。ソーシャルスキル尺度のそれぞれの項目をチェックし、粗点を出し、それを評価点へ換算すると、生徒の年齢集団を基にした相対評価ができる。つまり、同年代の生徒と比べて、「集団行動」「仲間関係」等のスキル領域のどこにつまずきがあるか把握できる。落ち込んでいる指導領域はそのまま指導領域に結びつく。指導後の評価を教員は客観的にしていく必要がある。そこで、ソーシャルスキル尺度を用いて効果測定をする。可能な限り、ソーシャルスキル指導をする教員だけでなく、生徒と一番長い時間接している在籍学級の教員に、指導前と指導後の評価をしてもらうことが望ましい。

本研究では「コミュニケーションの基礎的能力に係る評価シート」において、一定の基準※を満たした生徒に対して、この「ソーシャルスキルの尺度（小学生）」を用い、アセスメントを実施することとした。

※「コミュニケーションの基礎的能力に係る評価シート」において5歳～6歳の枠内に○が5個以上ついた場合（△2個で○1個の計算）

表2-3 ソーシャルスキル尺度（小学生用）

		ソーシャルスキル尺度（小学生用）													
		準備					備考								
		0	1	2	3	0	1	2	3	0	1	2	3		
対人マナー	1	よいことをしてもらったら「ありがとう」と言って感謝できる	0	1	2	3									
	2	いけないことをしてしまったら「ごめんなさい」などと謝ることができる	0	1	2	3									
	3	挨拶に合わせた適切な言葉遣いができる	0	1	2	3									
	4	人のものを借りるときはきちんと返ることができる	0	1	2	3									
	5	人前で奇異な行動をしない	0	1	2	3									
	6	約束した時間を守るができる	0	1	2	3									
	この状況で	7	場の雰囲気を感じることができる	0	1	2	3								
		8	次の活動にスムーズに移ることができる	0	1	2	3								
		9	自分の行動を振り返ることができる	0	1	2	3								
		10	相手の表情の違いに気づくことができる	0	1	2	3								
		11	相手の気持ちを理解することができる	0	1	2	3								
		12	グループ活動や班活動に参加する	0	1	2	3								
		13	途中で抜けたり、やめたりせずに仲間と遊びを続けることができる	0	1	2	3								
		14	相手の話を終わるまで聞いてから話すことができる	0	1	2	3								
		15	集団で遊ぶときなど、ゲームのルールを理解できる	0	1	2	3								
		16	ゲームなどの順番を守るができる	0	1	2	3								
	集団参加	17	与えられたルールに従ってゲームに参加できる	0	1	2	3								
		18	仲間同士で決めたルール・決まりを守る	0	1	2	3								
		19	日直や係の仕事をやりとすることができる	0	1	2	3								
		20	仲間と協力しながら仕事（または課題）を行うことができる	0	1	2	3								
進行役割	1	ゲームなどの勝負ごとで自分の負けを受け入れることができる	0	1	2	3									
	2	いやなことがあっても乱暴なことをしない	0	1	2	3									
	3	いやなことがあっても人を非難したり罵りたりしない	0	1	2	3									
	4	友達と寝ることは言ったりやったりしない	0	1	2	3									
	5	感情的になっても、気持ちをうまく切り替えられる	0	1	2	3									
	6	授業中、勝手に席を離れたり、そわそわ体を動かしたりしないで座っていられます	0	1	2	3									
	7	授業中、手は机の上に出したり、ぼんやりしたりしないで話を聞くことができます	0	1	2	3									
	8	授業中、関係のない物言や他の人の行動に注意がそれてしまわない	0	1	2	3									
	9	授業中、注意をひきたくて騒いだり、ふざけたりしない	0	1	2	3									
	10	行動する前にじっくり考える	0	1	2	3									
仲間関係の維持	1	知っている人に挨拶することができる	0	1	2	3									
	2	視線に合わせて人と話ることができる	0	1	2	3									
	3	仲間や親しい人に微笑みかけることができる	0	1	2	3									
	4	話すことなく仲間に話しかけることができる	0	1	2	3									
	5	仲間を選びに誘うことができる	0	1	2	3									
	6	遊んでいる仲間に自分から遊んで加わることができる	0	1	2	3									
	7	仲間と笑顔を続けることができる	0	1	2	3									
	8	仲間と笑顔を見せることができる	0	1	2	3									
	9	仲間と仲良く親和的に遊ぶことができる	0	1	2	3									
	10	友達と失敗したときなど動まじたり泣きだしたりできる	0	1	2	3									
	11	仲の良い友達との興味や趣味などを知っている	0	1	2	3									
聞く	1	先生や友達の話を集めて聞ける	0	1	2	3									
	2	先生の話や友達の発表の内容を理解できる	0	1	2	3									
	3	聞かれたことに対してきちんと答えることができる	0	1	2	3									
	4	言葉足らずでなく、話すことができる	0	1	2	3									
	5	物事を順序立てて説明することができる	0	1	2	3									
	6	人前で適切に発表やスピーチをできる	0	1	2	3									
	7	わからないことは質問できる	0	1	2	3									
	8	集団に向かって自分の考えを述べることができる	0	1	2	3									
	9	いやなことほしかりことわることができる	0	1	2	3									
	10	くやしきや怒りを言葉で伝えることができる	0	1	2	3									
話す	11	話し合いの内容に沿った発言ができる	0	1	2	3									
	12	決まった意見に従うことができる	0	1	2	3									
	13	意見がまとまらないときに、多発後、ジャンケン、妥協案を出すなど、意見をまとめる方法を提案できる	0	1	2	3									
	14	指名されたら議長や進行役などのまめ役を行うことができる	0	1	2	3									
	15	話し合いにおいて全体の意見を参考にしながら結論出すことができる	0	1	2	3									

(3) 特別支援学校におけるチームティーチングについて

通常、特別支援学校知的障害教育部門高等部の保健体育実技の授業においては、体育担当の教員が中心となり、複数の学年教員の協力を得ながら展開される。そこで、チームティーチング（以下、TT）についてまとめることとする。

ア TTの在り方

茨城県教育研修センターから、『特殊教育諸学校におけるチーム・ティーチングの在り方』が出されている。その中で、「集団指導の学習で個に応じた指導を効果的に進めるためには、学習の全体目標、個人目標、学習の方法、支援内容などの共通理解がなされ、教師間の連携・協力すなわちチーム・ティーチングが十分に機能することが課題となる。」²²⁾とある。指導にあたる全員の教員が指導目標を共通理解し、生徒への支援が必要な場面

で適切に効率よく効果的に支援することが求められる。

イ TTの指導・支援内容について

静岡大学実践総合センター紀要「特別支援学校（知的障害）におけるティーム・ティーチングによる授業改善の試み：『ティーム・ティーチングでの指導・支援の内容』表を活用した授業実践を通して」では、TTでの指導・支援の内容表の活用が有効であると考えられ、指導・支援の仕方を示した内容表が載せられている。保健体育の授業においても、TTの支援表づくりは有効である²³⁾と考えられる。

ウ TTのスキルの重要性

長沼は教員同士の連携ポイントを「主指導者と副指導者それぞれの役割の不明確さや、働きかけるタイミングの『ズレ』をいかに少なくするか²⁴⁾」だとし、「副指導者の動きこそがティーム・ティーチングの成功を大きく左右する²⁴⁾」と述べている。とすれば、体育授業においても、TTは授業を成功させる重要な要素であり、そのスキルを向上させることが授業を向上させるポイントであることもわかる。特に特別支援学校知的教育部門高等部の体育授業は、学校にもよるが生徒45名程に対して（学年単位の授業であれば）、教員が12名程の人数で行われる。障害のある生徒を対象としている特別支援教育であるからこそ、一人一人の生徒への個に応じた指導を充実させるために、より効果的なTTのスキルが課題となる。

以上のことから、本研究では、TTをより効果的に行うために、効率的に共通理解を図る方法として、体育授業の事前に予めST（サブティーチャー）に配付する学習指導案を工夫することとした。

3 使用用語の整理

「友達」「仲間」「生徒同士」の用語について

特別支援学校学習指導要領において、保健体育の内容（2）に「友達と協力」という言葉が示されている。しかし、本校生徒については、「友達」は「特定の親しい人」として捉えている傾向があると思われる。

本研究では、学年集団全員で取り組むことを目指していることから、より広い人を示す「仲間」という用語を用いて、生徒へ説明することとした。また、報告書では、生徒と生徒のかかわりを示す用語として教員と生徒のかかわりとの区別するために、「生徒同士」という言葉を用いることとした。しかし、学習指導要領の表記をそのまま用いる場面においては「友達」のままとすることとした。

第3章 検証授業

1 研究の仮説と検証の方法

(1) 研究の仮説

個々の人間関係形成能力の課題を踏まえ、SSTを活用した授業及び役割分担を明確にした球技：ゴール型のゲームを展開することで、学年全員で同じ種目を同じ空間で行うことが可能となり、友達と協力して運動する態度やコミュニケーションを必要とするパスの技能を向上することができるであろう。

(2) 期間

平成27年9月8日（火）～10月9日（金） 8時間扱い

(3) 場所

神奈川県立藤沢養護学校体育館

(4) 対象

高等部第2学年（41名）

(5) 単元名

いろいろなスポーツ「球技：ゴール型」

(6) 主なデータ収集の方法

- ア 文献研究
- イ 仮説の設定
- ウ 単元学習計画立案
- エ 社会性事前アセスメント9月4日（金）実施
- オ 教員向け事前アンケート9月4日（金）実施
- カ 授業実践
- キ 社会性事後アセスメント10月28日（水）実施
- ク 教員向け事後アンケート10月28日（水）実施
- ケ 仮説の検証を中心とした結果の分析・考察

(7) 分析の視点と方法—

分析の視点		分析の方法		
		手がかり	内容の例	
人間関係形成能力の育成	生徒の人間関係形成能力は育成されたか	コミュニケーションの基礎的能力に係る評価の変化	<ul style="list-style-type: none"> ○コミュニケーションの基礎的能力に係る評価（事前・事後） ○個別指導計画・個別プロフィールによる実態把握と事前・事後のコミュニケーション能力に係る評価による実態の変化 	<ul style="list-style-type: none"> ・一般的な6歳児までのコミュニケーションの基礎的能力を基にした「人間関係の形成に関する項目」「コミュニケーションの基礎能力」の2項目の評価 ・抽出生徒Aグループ2名の変化
		ソーシャルスキル尺度による評価の変化	<ul style="list-style-type: none"> ○ソーシャルスキル尺度の評価（事前・事後） ○個別指導計画・個別プロフィールによる実態把握と事前・事後のコミュニケーション能力に係る評価による実態の変化 	<ul style="list-style-type: none"> ・上記の評価シートでは評価できない生徒を対象に、ソーシャルスキルとしての「集団行動」「仲間関係スキル」「コミュニケーションスキル」の3つの尺度の評価 ・ソーシャルスキル尺度「仲間関係スキル」の変化 ・抽出生徒Bグループ2名の変化
		生徒の授業での取組姿勢の変化	○学習カードの記述内容の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・学習カードにおいて「楽しかった」と答えている生徒の変化 ・グループ感想の記述欄に書かれている人間関係形成能力に係る用語の変化
		生徒の授業での変容	○事後アンケートの自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の変容 質問 検証授業後、授業において、友達とのかかわりなどで生徒の変容がみられたか。

人間関係形成能力の育成	人間関係形成能力の育成に関する 教員の意識は変化したか	人間関係形成能力の育成について	○事前アンケート	・教員の意識 質問「人間関係形成能力」を高めることをねらいとする授業を、現在、どの教科、領域等で取り組んでいるか。
		保健体育授業に対する考え方の変化	○事前アンケート（高等部全体） ○事前・事後アンケート（高等部2学年）の変化	・教員の意識の変化 質問現在、自身が行っている（かかわっている）「保健体育（体育実技）」はどのような授業であると思うか。
必要とするパスの技能の向上	コミュニケーションを必要とするパスの技能の成功率は高まったか	○VTR分析	・球技：ゴール型簡易ゲームにおいて、第4時の『試しのゲーム』と第8時の『最終ゲーム』における一定時間内のチームごとのパスの成功数の変化 ・Bグループの生徒からAグループの生徒への働きかけによって生じたパスの成功本数の変化	

2 学習指導計画

(1) 生徒の実態

個別指導計画及び個別プロフィールにより把握した。また、「コミュニケーションの基礎的能力に係る評価シート」及び「ソーシャルスキル尺度」により、アセスメントを実施し、人間関係形成能力について課題を把握した。次の表は、障害の程度により分けた2つのグループより、それぞれ2名ずつを抽出したものである。4名の生徒は、全授業に参加していて、全試合、ゴール型簡易ゲーム「進撃のパスパス」（P.29参照）において、パスのやり取りをより多く行う、パス&ランの役割を担うポジションにいた生徒達である。

Aグループ全体と言えること（コミュニケーション能力に着目して）

周囲の行動に合わせて行動することができる生徒が多い。しかし、相手の言葉による指示に対して反応することが難しい生徒が多い。教員とコミュニケーションは取れるが、生徒同士で（教員を介さないで）コミュニケーションを取ることが難しい生徒が多い。

Bグループ全体と言えること（自他理解に着目して）

特定の友達とかかわることができる生徒が多い。また、相手の気持ちを考えずに発言することによって、トラブルになってしまったり、相手によって態度を変えたりする生徒が多い。自分の気持ちが整理できずに、イライラしてしまう生徒が多数いる。

※藤沢養護学校高等部2学年では、体育授業の際、主に個別の指示により教員と一緒に動くことができる生徒をAグループ、主に一斉指示で動くことができる生徒をBグループとして2つに分けて活動している。

【各グループ抽出生徒】

	生徒	アセスメント	発達段階	生徒の実態	個別指導計画における重点指導事項
A グループ	A	コミュニケーションの基礎的能力に係る評価シート	3歳6カ月～4歳11カ月	言葉の指示のみでは理解困難。多感。走ることが苦手。 意識が向いていれば、自ら挨拶や返事をする。友達が好きでよく話しかけたりしているが、唐突に興味関心のあることについて話すこともある。周りの人をよく見ており、周囲に合わせて行動する。 端的で簡潔な言語指示と合わせて、視覚的な支援があると混乱せず理解することができる。クラスの友達と関わるが多くなってきているが、興味があることを一方的に話すことも多い。	<ul style="list-style-type: none"> ・友達にたずねてから食事のおかわりをすることができる。 ・昼休みに楽しんで行える事柄を増やす。 ・失敗した時に自分から「失敗しました」と伝えることができるようになる。
	B		2歳～3歳5カ月	言葉かけがあれば、できる。言葉の発音が聞き取りにくい。さしすせそが、たちつとになる。確認、言葉かけが必要である。全体指示でわかるが、確認、言葉かけが必要である。集団で、話を聞くのは苦手。人が好き。言葉かけをしないと自分の判断で勝手に行動をすることがある。	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの友達に挨拶をする。 ・友達と協力しあって作業する。 ・集団活動の話し合いに参加し、自分のやりたい係を決めて取り組む。
B グループ	C	ソーシャルスキルの尺度平均点は10	小学校低学年 集団9 セルフ8 仲間5 コミュ8	特定の人になら自分から挨拶ができる。 2語文の会話ができる。しかし、相手の話を理解できなくても「わかりました」と言うことがある。 友達とも大人ともかかわれる。集団ゲームへの参加は促されるとできる。 時間を意識して行動できる。周囲に合わせて移動できる。 一人で電車を使って登校できる。緊急時には携帯から母に連絡が取れる。 説明後に個別の確認が必要。周囲の活動を見ながら参加できるが、動作模倣や理解度は低い。	<ul style="list-style-type: none"> ・周りの人と関わる機会を増やす。 ・「はい」と返事をする意識を持つことができる。 ・人にお願いができるようになる。 ・やりたい遊びを選択し、友達を誘うことができる。
	D		小学校低学年 集団6 セルフ8 仲間7 コミュ9	全体指示のあと個別確認が必要な時がある。わからない時には質問ができる。バッティング、キャッチボールとも秀でている。 挨拶はできるが、返事はしないときがある。 会話はできるが、相手を見ながら話を聞くことが苦手である。 概ね理解している。 個別の指示で理解できる。 積極的に人とかかわりを持つようとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・焦らず、ゆっくり話することができるようになる。 ・報告、相談は自分から相手の側に行つて伝えることができるようになる。 ・休み時間に自分から友達と関わり遊ぶことができる。

(2) 単元の目標

ア 【いろいろな運動】

- 1 段階 球技：ゴール型の運動をする。
- 2 段階 球技：ゴール型の運動を通して、体力や技能を高める。

イ 【きまり】

- 1 段階 きまりや球技：ゴール型のルールなどを守り、友達と協力して安全に運動をする。
- 2 段階 きまりや球技：ゴール型のルールなどを守り、友達と協力し、進んで安全に運動をする。

(3) 単元計画

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	
単元目標	1段階: 友達と協力して安全に運動する。								
	2段階: 友達と協力し、進んで安全に運動をする。								
ねらい	Aグループ	<ねらい①> どんなことをやるか知ることができるようにする	<ねらい②> 名前を呼ばれたら反応できるようにする	<ねらい②> 名前を呼ばれたら反応できるようにする	<ねらい③> 仲間と動きを合わせることができるようにする	<ねらい③> 仲間と動きを合わせることができるようにする	<ねらい④> やさしく相手に触れることができるようにする	<ねらい⑤> 仲間とコミュニケーションをとりながら楽しむことができるようにする	<ねらい⑤> 仲間とコミュニケーションをとりながら楽しむことができるようにする
	Bグループ	<ねらい①> 単元の見通しを持つことができるようにする	<ねらい②> 仲間の名前を呼んで反応を待つことができるようにする	<ねらい②> 仲間の名前を呼んで反応を待つことができるようにする	<ねらい③> 仲間の特性を知り、リードすることができるようにする	<ねらい③> 仲間の特性を知り、リードすることができるようにする	<ねらい④> 相手の気持ちを考え、やさしく相手に触れることができるようにする		
5	<ul style="list-style-type: none"> ●整列・あいさつ 出席確認 ●オリエンテーション -ゴール型の特性を理解する -安全な活動の仕方を確認する -学習の見通しを持つ <p style="text-align: center;">●整列 ●挨拶、出席確認 ●本時の内容 ●ペアラジオ体操</p>								
10	<ul style="list-style-type: none"> -チームの発表 ●ゲームについて 								
15	『進撃のパスパス』について ・ラン&パスで進む。 ・ゴールマンがキャッチできたら1点。 ・セーフティゾーンには決められた人しか入れない。 ・攻撃では、セーフティゾーンを経由しなければならない。	SSG (ネームパス)	SSG (ネームパス)		SSG (フープde玉入れ)	SSG (タッチリレー)	進撃のパスパス 分解練習	進撃のパスパス 分解練習	
20				試しのゲーム (進撃のパスパス)					
25	●準備運動 ・ペアラジオ体操	ラン&ネームパス ゲーム	ラン&ネームパス ゲーム		進撃のパスパス	進撃のパスパス	進撃のパスパス	進撃のパスパス	
30	SSG ※1 【ドーンじゃんけん】								
35	ソーシャルスキルの評価・クラスごとに学習ノートの記入								
40	本時のまとめ								
45	●用具の片づけ ●本時の振り返り 発表								
50									
時間	1	2	3	4	5	6	7	8	

※1 SSG…ソーシャルスキルゲーム

(4) 学習指導の工夫

ア 各グループのねらいとSST

本研究では、藤沢養護学校高等部2年生の人間関係形成能力の実態を、社会性のアセスメントから把握した。その結果、高等部2年生Aグループの生徒たちは、相手の言葉に対して反応することが難しかったり、また、教員とのコミュニケーションは取れるが、生徒同士では教員を介することなくコミュニケーションを取ることは難しかったりと、人間関係形成能力の「コミュニケーション」に課題があることが把握できた。また、Bグループの生徒たちは、自分の気持ちが整理できずにイライラすることから言葉が乱暴になったり、トラブルになったりすることがある。これについては相手の気持ちを考えて行動することが難しいという人間関係形成能力の「自他の理解」に関する課題があることが把握できた。




これらの課題を踏まえて、5つのねらいをグループごとに立て、これに応じたSSTを取り入れることとした。



【SSTおよびSSGの計画】 ※各ゲームの詳細は【本時の展開】参照






	グループ	ねらい	SST	SSG	実施時間
	①	A	どんなことをやるか 知ることができるようにする	挨拶をしなかったら 本時のSSGでは『握手』と『挨拶』が重要であることを伝える	
	B	単元の見通しを持つことができるようにする			
②	A	名前を呼ばれたら反応できるようにする	名前を呼ばないと 相手の反応を求める時には、相手の名前を呼ぶことが必要であることを伝える	ネームパス 名前を呼んで、反応があったらパスをし、名前を呼ばれたら反応するボール受け渡しゲーム ラン&ネームパス ネームパスに動きを加えたボール運びゲーム	2 3
	B	仲間の名前を呼んで反応を待つことができるようにする			
③	A	仲間と動きを合わせることができるようにする	一緒に動かないと仲間のことを考えないと 仲間と協力して活動するときには仲間の気持ちを考えることが必要であることを伝える	フープ de 玉入れ ペアで一つのフープに入って行うボール運びゲーム	5
	B	仲間の特性を知り、リードすることができるようにする			
④	A	やさしく相手に触れることができるようにする	強く叩くと相手の気持ちを考えないと 仲間に触れるときは力を加減する必要があることを伝える	タッチリレー 仲間の背中をタッチする伝言競争	6
	B	相手の気持ちを考え、やさしく相手に触れることができるようにする			
⑤	全体	仲間とコミュニケーションをとりながら楽しむことができるようにする	進撃のパスパス (P. 29 参照) 「友達と協力して」をねらいとし、球技：ゴール型のパスによる攻撃に着目したボール運びゲーム	4	
				5	
				6	
				7	
				8	

イ ペアラジオ体操





ラジオ体操は、藤沢養護学校を始め、多くの知的障害教育部門の特別支援学校において取り組まれている体操である。部位を意識することが難しい生徒や、動きが不十分な生徒は多いが、動きの流れは多くの生徒が理解しているところである。今回の検証授業では、「友達と協力して」というねらいに向けて、準備運動から友達と1対1でかかわり合い、球技でのかかわり合いにスムーズに入っていくことができるように、ペアラジオ体操を取り入れることとした。このペアラジオ体操は、筑波大学の長谷川教授が考案したものである。これを藤沢養護学校高等部2年生の生徒たちの実態に合わせて簡易化した。特別支援学校の生徒の中には、友達と動きを合わせて行うことが難しい生徒についても、ラジオ体操の動きを基本としているので、動きやすく、覚えやすいという利点がある。

運動(本来のペアラジオ体操の動きを※で示す)	方 法	
1 腕を振る運動 (前奏)	手をつないで、互いに腕をゆさぶる。	
2 伸びの運動	手を引き合いながら、背筋を伸ばす。バランスを取り合いながら行う。	
3 腕を振って足を曲げ伸ばす運動	<p>赤(ゼッケン 13):腕を前から横に振って、胸張り。</p> <p>青(ゼッケン 10):赤の腕を避けるようにして足を屈伸。</p> <p>交互に繰り返す。</p>	

<p>4 腕を回す運動</p> <p>※腕の前後振のシンクロ</p>	<p>両腕を2回回旋する。</p> <p>互いの掌を上で合わせる。</p>	
<p>5 胸をそらす運動</p> <p>※背中合わせで行う。 交互に行う</p>	<p>青:左右に腕を振ったら、相手に大きく寄りかかって胸を大きく張って後ろに体重を傾ける。</p> <p>赤:青が倒れ掛かってきたら両手で支える。</p> <p>上の課題を交代して繰り返す。</p>	
<p>6 体を横に曲げる運動</p>	<p>両手をつなぎ、前方に体を開いて横に引き合う。</p> <p>手をつないだまま、互いの向きを変えて繰り返す。</p>	

		
<p>7 体を前と後ろに曲げる運動</p> <p>※股下タッチ後、互いに後ろにそらし、逆さまにらめっこ</p>	<p>上体の力を抜いて、軽くはずみをつけながら、股下で両手を合わせ3回掌を合わせる。</p> <p>両腕を組んで、180度横に移動する。</p> <p>反対の場所で同じことを繰り返し、元の場所に戻る。</p>	 
<p>8 体をねじる運動</p>	<p>二人とも同じ方向に振り返り、後ろで掌を合わせる。</p> <p>気をつけの姿勢をとる。</p> <p>上を2回繰り返す。</p> <p>大きく上で2回掌を合わせる。</p>	 

<p>9 腕を上下に 伸ばす運動 ※上に伸ばす際にその ままの姿勢で後ろへ倒れパート ナーが支える地藏倒 しの要領</p>	<p>赤は左足を、青は右足を開く。 同時に腕で自分の肩をさわる。 肩→上→肩→気をつけの姿勢 気をつけの姿勢になる時に開い た足を戻す。 上では掌を合わせる。 上の課題を逆の足で繰り返す。</p>	
<p>10 体を斜め下に まげる運動</p>	<p>つないだ外側の手を下へ4回は ずませる。手をつないだまま、反 対側へまわす。 反対側で同様に、つないだ外側 の手を下へ2回はずませる。 繰り返す。</p>	
<p>11 体をまわす運動</p>	<p>両腕をつないだまま、二人同じ 方向に腕を回旋させる。</p>	

	<p>背中合わせの状態を通り過ぎるようにして、回転する。</p> <p>反対に回転する。</p>	
<p>12 両あしとび ジャンケン</p>	<p>1、2の3で足ジャンケン。勝ったら喜びを体で表現し、負けたら悔しさを体で表現する。</p>	
<p>13 腕を振って曲げ 伸ばす運動</p>	<p>(体操2と同じ)</p>	
<p>深呼吸</p>	<p>右手を合わせて上に伸びながら息を吸い、腕を下ろしながら息を吐く。</p> <p>逆の手も行う。</p> <p>繰り返す。</p>	 

後奏	お互いに握手をする。	
----	------------	--

ウ 最終ゲーム（進撃のパスパス）

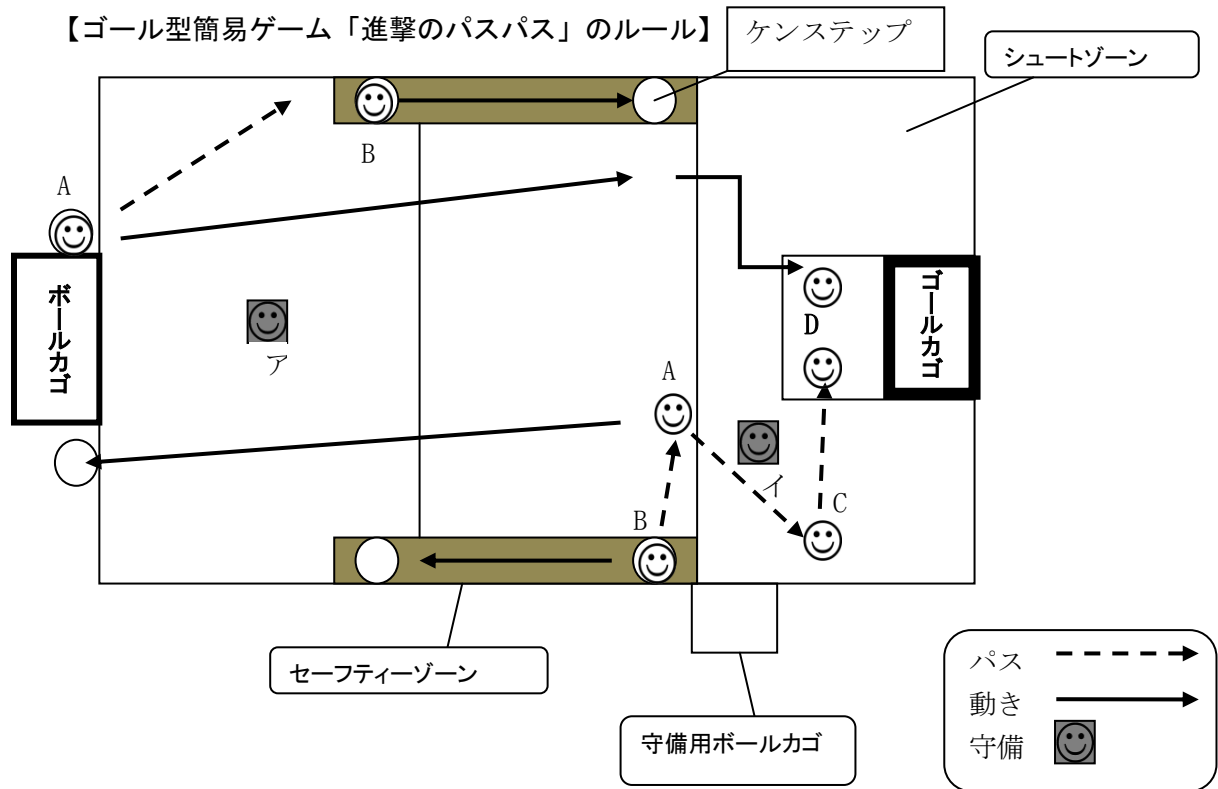
最終ゲーム（進撃のパスパス）は簡易化されたルールで展開される球技：ゴール型とした。これは卒業後の社会生活に向けて、1人の生徒ができるだけ多くの生徒とかかわり合えるようにし、学年集団全員で取り組めるように考案した。また、1クラス1チームとしてクラス対抗戦が行えるようにした。次にボール操作を限定し、パスに特化することにより、ねらいであるコミュニケーション能力の育成を図ることができるようにした。



<ゲームの視点>

- ・グラウンドではなく、体育館で行う。（生徒たちの集中力を高めるため）
- ・運動量を確保する。
- ・ゴールゾーンとすることで、ゴールエリアを広くし得点しやすくする。
- ・ゴールゾーンは、コーンや安全バーなどを使用する。（視覚的にわかりやすくする）
- ・対戦型にすることにより、接触するプレイを体験できるようにする。
- ・ボールはソフトバレーボールを使用する。（多少緩やかなスピード感が出て、そして当たっても痛くはないため）
- ・一定方向で攻撃し（攻守の切り替えをせず）、守備との区別ができるようにする。
- ・セーフティーゾーンを作る。（ボール運動が苦手な生徒のために、安全に安心したパス交換ができるようにする。）
- ・パス交換するコースを設定する。（1対1で行えるようにする）
- ・ラインテープで移動スペースを示したコースを作り、ケンステップで移動先がわかるようにする。

【ゴール型簡易ゲーム「進撃のパスパス」のルール】



攻撃 ☺

- 1 A(2人同時スタート)はBの名前を呼んでパスしシュートゾーンの手前まで走る。
- 2 パスをもらったBは目印に向かって走り、走ってきたAにパスを返す。
- 3 AとシュートゾーンにいるCは守備者にタッチされないようにパスし合い、ゴールマンであるDにパスをする。自分でボールを持ちこんでDにパスを行うか、Cとパス交換をしながらDにパスをする。シュート後、Aはスタート地点に戻る。
- 4 Dはキャッチできたら、ゴールカゴにシュートする。

守備 ☹

- 1 守備者アは、Aがボールを持ったらBにパスするのを防ぐ。攻撃側は2人いるため、行ったり来たりして防ぐ。
- 2 攻撃者がシュートゾーンに入ったら、守備者イは、攻撃者にシュートをさせないようにし、その際ボールを保持した攻撃者にタッチできたら、防御成功とする。
- 3 守備者がボール保持者にタッチできた場合は、攻撃者からボールをもらい、「守備用ボールカゴ」に返しに行く。

エ 学習カード (チームカード)

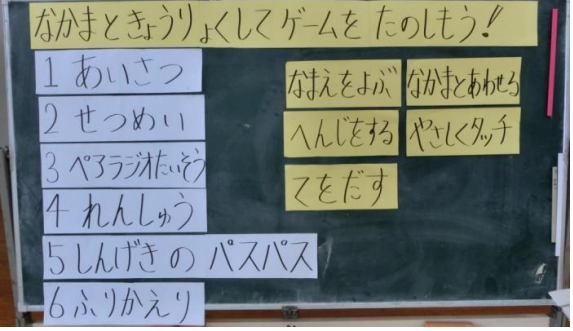
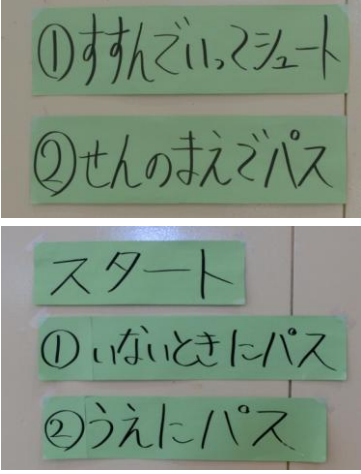


生徒たちの知的能力の実態に幅があり、読んだり書いたりすることが難しい生徒、感情を表現することが難しい生徒がいることなどを理由に、授業を学年集団全員で行う場合、学習カードを統一のもので扱うことが難しいと考える。

しかし、本研究では、学習カードを通してクラスの生徒同士のかかわり合いの過程を記入し、生徒個々の内面を知ることはできないかと考えた。そこで、生徒同士の話し合いの中から、クラスの意見を出すことができる学習カード (チームカード) を作成することとした。質問項目を設定し、全時間を通して同形式で記入できるようにした。

学習カードの記入は、クラス (チーム) のリーダーを中心に話し合いを進め、円になって、リーダーの質問に全員が答えられるようにした。また、感情を言葉にすることが難しい生徒については、他の生徒や担任の教員が様子を見取り、記入することとした。

しんげき 進撃のパスパス チームカード									
クラス 6 組									
9月29日 (火)									
ペアラジオたいそう	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん	Hさん	Iさん
なかま きょうりょく たの 仲間と協力して楽しくできましたか？ (○をつける)									
なかま きょうりょく 仲間と協力できたところは、どこですか？									
たの 楽しかったことは、なんですか？									
しんげき 進撃のパスパス									
なかま きょうりょく たの 仲間と協力して楽しくできましたか？ (○をつける)									
なかま きょうりょく 仲間と協力できたところは、どこですか？									
たの 楽しかったことは、なんですか？									
きょう じゆぎょう 今日の授業で むずかしかったことは なんですか？									

オ 教具の工夫

教 具	工夫したこと
全体進行表	<ul style="list-style-type: none"> 学習活動を上から順に書いて掲示し、活動が終わるごとにカードを外し、授業の流れが分かるようにした。 
掲示	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が今、取り組んでいることを文字で見て確認できるように、体育館の壁に掲示した。生徒に意識させる重要度順に、掲示した。 
ボール	<ul style="list-style-type: none"> 使用するボールは当たっても痛くなく、落ちても弾むソフトバレーボールとした。 
三角コーンとコーンバー	<ul style="list-style-type: none"> ゴールゾーンを視覚化し、攻撃側が進入できないエリアが分かるようにした。 

ゼッケン	<ul style="list-style-type: none"> ・ペアラジオ体操用 赤ゼッケン・青ゼッケンをつけて行い、手本の教員と同じ立ち位置で自分と同じ色の手本を見ることができるようにした。
ゼッケンやコーンの色分け	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム用 5クラスに対し5色のゼッケンを用意した。整列する際には、先頭の前に並べるコーンの色と合わせ、クラスごとに移動する時に、そのコーンを先に移動させることで、移動先を示すようにした。全時間通して統一して行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・手本の教員 教員は生徒の5色とは別の色のゼッケンをつけて手本を行う。(これにより、生徒が「手本をしている先生」として認識しやすくなった。)

カ チーム編成について

知的障害の特性として、環境等への変化に適応するためには時間を要することが多い。そこで、単元を通して、チームのメンバーを固定することとした。特別支援学校では、人間関係やリーダー性、男女、重複障害の生徒の状況等を考慮したクラス編成となっている。よってクラスをそのままチームとすることは大変有効であると考えた。これにより、日常生活でのかかわり合いのきっかけにもなっていくものと考えた。

キ 授業略案

打合せ時間が少なくても、TTが円滑に進められるように、授業略案を工夫した。藤沢養護学校では学年単位の体育の授業を実施する場合、通常 11 人～13 人の教員で学年の生徒を支援している。そのため、十分な事前の打合せができていない時には、誰がどの役割を担うかは、その場の教員の裁量となってくる。そこで打合せがなくても、一人一人が役割を理解して授業に臨むことができるようにするために、工場等で用いられる作業フロー図を参考に全体の流れとそれぞれの教員の役割が明確になるよう、図式化した授業略案を作成した。

体育 学習指導案 (検証授業 7/8時間目) 10月6日 13:25

参加教員 体育科: ○○t, ○○t, ○○t (3) ST: ○○t, ○○t, ○○t, ○○t, ○○t, ○○t, ○○t, ○○t, ○○t (9名)

(1) 本時のねらい
仲間とコミュニケーションをとりながらゲームを楽しむ。

※毎授業、時間が延びてしまって本日に申し訳ありません。
※最後の2回は、ゲームがメインなので、さらに盛り上げていただければと思います。

(2) 展開

時間	生徒の学習内容・活動	教員の指導・手立て・安全面への配慮										
		MT	体育科	ST 1	ST 2	ST 3	ST 4	ST 5	ST 6	ST 7	ST 8	ST 9
はじめ	1 準備・集合 ・並び方指示 ・健康観察 ・報告	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10分	2 挨拶 ・日直に指示											
3	本時の内容確認 【学習内容】なかまと きょうりょして ゲームを たのしもう											
な	○学習の見通しをもつ ・本時の活動 ・授業のポイント、流れ											
25分	4 体操 ○ペアラジオ体操 動きを1つ抽出して行う。 曲を流して行う。											
な	5 逆走のバスパス 分解練習 ○説明を聞く ○手本を見る。 バス練習について スタート練習について ○5か所に分かれて 分解練習を行う。											
25分	6 逆走のバスパス ゲーム ○説明を聞く ・リーグ戦											
まとめ	7 振り返り ○ソーシャルスキル振り返り ・評価 ・学習カードの使い 方 ○学習カードの記入(クラス ごと) まとめ ○整理体操 ○本時のまとめ ○挨拶											

(3) 準備物 三角コーン 10、マーカー10、ゼッケン5色×8枚、ケンステップ×12、かご4、ソフトプレーボール 40、掲示物(学習内容、流れなど)、CDデッキ、ラジオ体操CD、学習カード

3 授業の実際

【本時の展開】（1／8時間）9月8日（火）

（1）本時のねらい

〈ねらい①〉 どんなことをやるか知ることができるようにする。（Aグループ）

〈ねらい②〉 単元の見通しを持つことができるようにする。（Bグループ）

（2）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立て										
は じ め	<p>1 集合・整列・挨拶・出席確認</p> <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">ステージ</td> <td>△ 1組</td> </tr> <tr> <td></td> <td>△ 2組</td> </tr> <tr> <td></td> <td>△ 3組</td> </tr> <tr> <td></td> <td>△ 4組</td> </tr> <tr> <td></td> <td>△ 5組</td> </tr> </table> <p>2 オリエンテーション</p>	ステージ	△ 1組		△ 2組		△ 3組		△ 4組		△ 5組	<ul style="list-style-type: none"> ・ Aグループ（赤）・Bグループ（青）のゼッケンを着けて並ぶよう促す。 ・ 生徒の出席確認、健康観察。 ・ 学習の始まりが意識できるように静かに注目させてから、姿勢を正して挨拶ができるようにする。 ・ 活動に見通しが持てるように本時の学習内容とポイント、流れを掲示しておく。
ステージ	△ 1組											
	△ 2組											
	△ 3組											
	△ 4組											
	△ 5組											
25 分	<p>【学習内容】 みんなでやるボールゲームをしよう！</p> <p>○学習の見通しをもつ ○「なかま」を覚える ○「進撃のパスパス」を知る</p> <p>3 準備運動</p> <p>○ペアラジオ体操</p> <p>抽出した動きを行う。</p> <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td>手本の先生と、並び方が鏡になるよう 青が右で赤が左になる。</td> </tr> </table>	手本の先生と、並び方が鏡になるよう 青が右で赤が左になる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 球技では <ul style="list-style-type: none"> ➢ 「仲間」を意識することが大切 ➢ 友達とのコミュニケーションが大切 ・ イラストや写真、見本を見せながら、「進撃のパスパス」について説明する。 ・ 抽出した動きを指導する。 ・ Aグループ（赤）とBグループ（青）の生徒が組み、青と青はなるべく組まない。 ・ 友達のことを気遣ったり協力したりした場面があったら特にほめる。 									
手本の先生と、並び方が鏡になるよう 青が右で赤が左になる。												
な か か 15 分	<p>4 SSG*【ドーンじゃんけん】</p> <p>○説明を聞く ○手本を見る ○隣の人とやってみる ○逆隣りの人とやってみる。</p> <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">ステージ</td> <td></td> </tr> </table> <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td>前の人を負けたら次の人が出て、負けた人は後ろに並ぶ。</td> </tr> </table>	ステージ		前の人を負けたら次の人が出て、負けた人は後ろに並ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ じゃんけんが難しい生徒はじゃんけんカードを使うよう指示する。 ・ 生徒がわかるようにポイントを絞って説明する。『握手』と『挨拶』が重要であることを伝える。 ・ 個別にサポートが必要な生徒には教員がそばに付くことを確認する。 ・ じゃんけんカードを使うことについて、生徒と相談するか判断するよう伝える。 ・ STに順序よく流れるよう、声かけするように伝える。 ・ 生徒の動線をチェックし、安全を確認する。 ・ 挨拶の仕方が上手な生徒をチェックし、A・B 1人ずつ選び、ほめる。 <p>※クラスごとに行う。</p>							
ステージ												
前の人を負けたら次の人が出て、負けた人は後ろに並ぶ。												

	<ul style="list-style-type: none"> ・各クラス、A・Bグループが均等な人数になるように 2つに分かれ、対面に並ぶ。 ・線の上をたどって走っていき、向こうから来た人とぶつかる場所で握手して『よろしくお願ひします』と言ってから、じゃんけんを行う。 ・勝った方はボールを持って進み、負けた方はスタートした列の後ろに並ぶ。 ・相手のコーンまで行きボールをかごにいれたら1点。 	<p>S S T</p> <p>①教示 【挨拶をしなかったら】</p> <p>②モデリング 【挨拶の仕方】</p> <p>③リハーサル 【ドーンじゃんけん】</p> <p>④評価 【挨拶が適切にできているか】</p>
<p>ま と め</p> <p>10 分</p>	<p>5 ソーシャルスキル振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ○いい挨拶の紹介・振り返り ○学習カードの記入（クラスごと）、発表 <p>6 本時のまとめと次時の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ○整理運動 ○本時のまとめ ○次時からのチーム確認 ○挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ・ソーシャルスキルが上手にできるようになることが基本であることを伝える。 ・学習カードの使い方を説明し記入できるようにする。 ・健康観察を行う。 ・MT^{*2}に注目するよう促す。

※SSG：ソーシャルスキルゲーム

※メインティーチャー（主として授業を進める教員）

（3）準備する物

三角コーン10、クラスナンバー表示、ゼッケン2色（赤・青）

掲示物（学習内容、流れ、『仲間』、「進撃のパスパス」説明用イラストや写真、など）、CDデッキ、ラジオ体操CD、じゃんけんカード、学習カード

【授業者による振り返り】

生徒たちは、オリエンテーションでは授業者に注目し、よく話を聞いていた。プレゼンテーションソフトを使って行ったことが、集中して話を聞くことができた1つの要因であると考えられる。

ペアラジオ体操では、まだ動きについていくことは難しいものの、ペアになった生徒とコミュニケーションを取り、Bグループの生徒がAグループの生徒をサポートしながら行うことができていた。

SSG（ドーンじゃんけん）では、「挨拶をしなかったら」という教示をよく聞いていた。「ドーンじゃんけん」は、SSTの流れのリハーサルであり、ルールを理解はすぐにできたようであった。ただし、教示から説明が継続してしまったこと、さらに、生徒を立たせたままで説明したことによって集中力を欠けさせてしまったことについて反省している。これらのことがなければさらにスムーズであったと思われる。教示通りに、相手のことを気遣いながら握手をし、相手を見て挨拶をすることができる生徒が多かった。

生徒たちは今後行うボールゲームのことや、SSGのことを理解した様子であった。

【本時の展開】（2／8時間）9月11日（金）

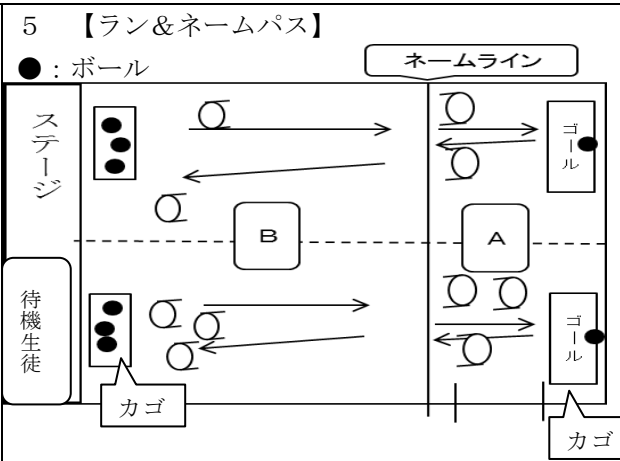
（1）本時のねらい

〈ねらい②〉名前を呼ばれたら反応できるようにする（Aグループ）

〈ねらい②〉仲間の名前を呼んで反応を待つことができるようにする。（Bグループ）

（2）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立て														
は じ め 15 分	<p>1 集合・整列・挨拶・出席確認</p> <table border="1"> <tr> <td rowspan="5">ス テ ー ジ</td> <td>△ 1</td> </tr> <tr> <td>△ 2</td> </tr> <tr> <td>△ 3</td> </tr> <tr> <td>△ 4</td> </tr> <tr> <td>△ 5</td> </tr> </table> <p>2 本時の内容確認</p> <p>【学習内容】なかまのなまえをよんだり、それにこたえたりしよう。</p> <p>○ソーシャルスキルの教示 【名前を呼ばないと】</p> <p>3 準備運動</p> <p>○ペアラジオ体操 両手をつないで回転する動きを抽出して教えてから行う。</p>	ス テ ー ジ	△ 1	△ 2	△ 3	△ 4	△ 5	<p>・Aグループ（赤）・Bグループ（青）のゼッケンを着けて並ぶよう促す。</p> <p>・生徒の出席確認、健康観察。</p> <p>・学習の始まりが意識できるように静かに注目させてから、姿勢を正して挨拶ができるようにする。</p> <p>・活動に見通しが持てるように本時の学習内容とポイント、流れを掲示しておく。</p>								
ス テ ー ジ	△ 1															
	△ 2															
	△ 3															
	△ 4															
	△ 5															
な か 25 分	<p>4 SSG【ネームパス】</p> <p>○説明を聞く ○手本を見る ○ペアの友達と向かい合い、やってみる</p> <table border="1"> <tr> <td rowspan="2">ス テ ー ジ</td> <td>☺☺☺☺☺☺</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>⇕⇕⇕⇕⇕⇕</td> <td>B</td> </tr> <tr> <td></td> <td>☺☺☺☺☺☺</td> <td></td> </tr> </table> <p>・AグループとBグループの生徒が対面になって並ぶ。Aグループの生徒は自分の番になったら後ろ向きになる。</p> <p>・Bグループの生徒が対面するAグループの生徒の名前を呼び、Aグループの生徒が振り向いてからパスを出す。</p> <p>・Aグループの生徒がキャッチしたら、パスを出したBグループの生徒は元の列に戻り、列の後ろにまわる。次のBグループの生徒が対面するAグループの生徒からパスをもらい、元の列に戻り、列の先頭の人にパスをする。</p>	ス テ ー ジ	☺☺☺☺☺☺	A	⇕⇕⇕⇕⇕⇕	B		☺☺☺☺☺☺		<p>・個別にサポートが必要な生徒には教員がつく。</p> <table border="1"> <tr> <td>SST</td> </tr> <tr> <td>①教示 【名前を呼ばないと】</td> </tr> <tr> <td>②モデリング 【名前を呼ぶ】 【反応する】</td> </tr> <tr> <td>③リハーサル 【ネームパス】</td> </tr> <tr> <td>④評価 【名前を呼べたか】 【手を出して反応できたか】</td> </tr> <tr> <td>⑤般化 【ラン&ネームパス】</td> </tr> </table> <p>※P11 参照</p> <p>・パスをしたら後ろに並ぶという流れができていないか確認し、できていなければ、仲間に声をかけさせる。</p> <p>・動線をチェックし、安全を確認する。</p>	SST	①教示 【名前を呼ばないと】	②モデリング 【名前を呼ぶ】 【反応する】	③リハーサル 【ネームパス】	④評価 【名前を呼べたか】 【手を出して反応できたか】	⑤般化 【ラン&ネームパス】
ス テ ー ジ	☺☺☺☺☺☺		A													
	⇕⇕⇕⇕⇕⇕	B														
	☺☺☺☺☺☺															
SST																
①教示 【名前を呼ばないと】																
②モデリング 【名前を呼ぶ】 【反応する】																
③リハーサル 【ネームパス】																
④評価 【名前を呼べたか】 【手を出して反応できたか】																
⑤般化 【ラン&ネームパス】																

	<p>5 【ラン&ネームパス】</p> <p>●：ボール</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・名前の呼び方や反応の仕方をチェックしておく。A・B 1人ずつ選び、ほめる。 ・パスが強くなり過ぎないように、力加減について、言葉かけを行う。 ・教員が手本を見せる。 ・生徒がわかるようにポイントを絞って説明する。 ・チームワークが大切なことを伝える。 ・生徒が入り乱れるので、安全を確認しながら進める。
	<ul style="list-style-type: none"> ・各クラスAグループとBグループに分かれる。 ・Aグループの生徒は、ネームラインのそばで後ろを向いて待機。（ケンステップに入る） ・よーいどんの合図で、Bグループの生徒はカゴからボールを持って、ネームラインまで走る。名前を呼んで、Aグループの生徒が振り返って反応を示したらパスをする。難しければ手渡しもOK。 ・Aグループの生徒はパスを受けたら、自分のクラスのゴール（かご）に入れる。 ・Bグループの生徒は、連続で同じ人に渡してはいけない。制限時間は1分30秒。 ・自分のクラスのゴール（カゴ）にどれだけボールが運べるかを競う。 	
<p>まとめ</p> <p>10分</p>	<p>6 ソーシャルスキル振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ○いい挨拶の紹介・振り返り ○学習カードの記入（チームごと）、発表 <p>7 本時のまとめと次時の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ○整理運動 ○本時のまとめ ○挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ・ソーシャルスキルが上手にできるようになることが基本になることを伝える。 ・学習カードの使い方を説明し記入できるようにする。 ・健康観察を行う。 ・MTに注目するよう促す。

（3）準備する物

三角コーン6、マーカー12、チームナンバー表示、ゼッケン6色×7枚、かご4、ソフトバレーボール40、掲示物（学習内容、流れなど）、CDデッキ、ラジオ体操CD、学習カード

【授業者による振り返り】

生徒たちがペアラジオ体操で動きを覚え始めた。覚えていないところがあっても、手本を見ながら、声をかけ合い動こうとしている様子があった。

ラン&ネームパスでは、ねらいどおり、競技性が伴ってくると名前が呼べなくなったり、焦って相手を気遣うことができなかつたりして、うまくできない生徒が多かった。競技をしながらでもできるようになれば、ゲームを行ったときにも相手を気遣える場面が出てくるはずである。

また、ルールを理解しきれていない生徒を指導する教員を決めておかなかったことで生徒の動きの修正をするのが遅れてしまった。よりわかりやすいルールに修正するか、定着するまでは、教員のサポートをもう少し手厚くするかしないと、上達具合に差が出ると考えられる。

ラン&ネームパスは少し時間をかけて工夫し、それぞれの生徒がさらに精度の高い動きができるようになるとよいと思った。

クラス（チーム）ごとの振り返りは、本時の学習内容である名前を呼んだり、反応したりすることに関するものが挙げられ、内容が濃かったと思う。リーダーシップをとることができる生徒の積極性をさらに高め、社会性をより身に付けられるようにしたいと考える。

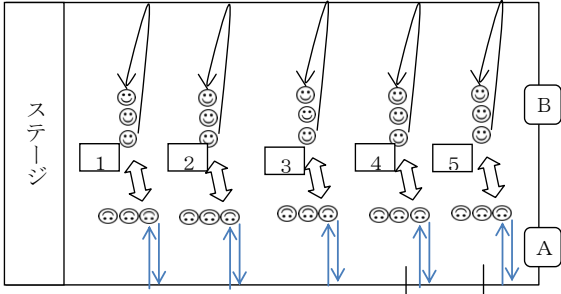
【本時の展開】（3／8時間）9月18日（金）

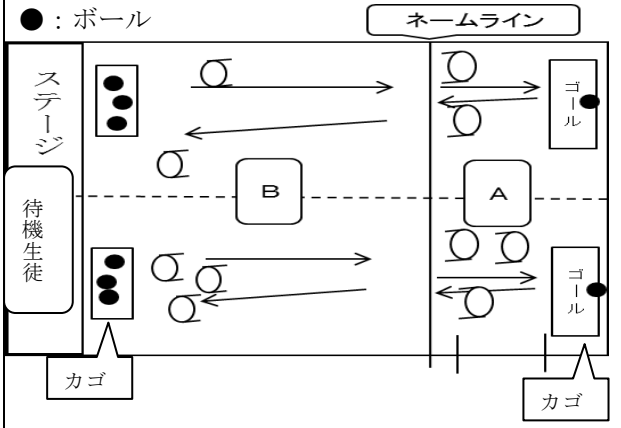
（1）本時のねらい

〈ねらい②〉名前を呼ばれたら反応できるようにする。（Aグループ）

〈ねらい②〉仲間の名前を呼んで反応を待つことができるようにする。（Bグループ）

（2）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立て
は じ め	1 集合・整列・挨拶・出席確認 2 本時の内容確認	<ul style="list-style-type: none"> ・チームごとにゼッケンを着けて並ぶよう促す。 ・生徒の出席確認、健康観察。 ・学習の始まりが意識できるように静かに注目させてから、姿勢を正して挨拶ができるようにする。 ・活動に見通しが持てるように本時の学習内容とポイント、流れを掲示しておく。
15 分	3 準備運動 ○ペアラジオ体操 交互に後ろに寄りかかる動きを抽出して教えてから行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・学年全体が活動についてくることができるよう音楽の速度を遅くして行う。
な か	4 SSG【ネームパス】 ○説明 ○手本を見る ○実際にやってみる	<ul style="list-style-type: none"> ・個別にサポートが必要な生徒には教員が付く。 ・パスをしたら後ろに並ぶという流れができているか確認し、できていなければ、仲間に声をかけさせる。 ・後ろに並ぶ時の動線を一定方向にし、安全を確認する。 ・名前の呼び方や反応の仕方をチェックしておく。A・B 1人ずつ選び、ほめる。 ・パスが強くなり過ぎないように、力加減について、言葉かけを行う。
25 分	 <ul style="list-style-type: none"> ・AグループとBグループの生徒が対面になって並ぶ。Aグループの生徒は後ろ向きで待機。 ・Bグループの生徒が対面するAグループの生徒の名前を呼び、Aグループの生徒が振り向いて、反応してからパスを出す。 ・Aグループの生徒がキャッチしたら、パスを出したBグループの生徒に返し、後ろの壁をタッチして帰ってきて後ろ向きで待機をする。 ・パスが返ってきたBグループの生徒は、ボールを持ったまま、後ろの壁にタッチをして列の一番後ろに並び、ボールを手渡しで前に送る。 	<p>SST</p> <ul style="list-style-type: none"> ①教示 【名前を呼ばないと】 ②モデリング 【名前を呼ぶ】 【反応する】 ③リハーサル 【ネームパス】 ④評価 【名前を呼んでからパスできたか】 【反応しているかどうか】 ⑤般化 【ラン&ネームパス】

	<p>5 【ラン&ネームパス】</p> <p>●：ボール</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体に指示が通るようにゆっくり説明する。 ・生徒がわかるようにポイントを絞って説明する。 ・安全を確保するためにそれぞれのスペースが狭くならないよう確認しながら進める。 ・クラスのチームワークが大切なことを伝える。 ・生徒が入り乱れるので、安全を確認しながら進める。
	<ul style="list-style-type: none"> ・各クラスAグループとBグループに分かれる。 ・Aグループの生徒は、ネームラインのそばで後ろを向いて待機。(ケンステップに入る) ・よーいどんの合図で、Bグループの生徒はボールを持って、ネームラインまで走る。名前を呼んで、Aグループの生徒が振り返って反応を示したらパスをする。難しければ手渡しもOK。 ・Bグループの生徒は、連続で同じ人に渡してはいけない。制限時間は1分30秒。 ・自分のクラスのゴールにどれだけボールが運べるかを競う。 ・待機生徒は、ステージの上。 	
<p>まとめ</p> <p>10分</p>	<p>6 ソーシャルスキル振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ○いい挨拶の紹介・振り返り ○学習カードの記入(チームごと)、発表 <p>7 本時のまとめと次時の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ○整理運動 ○本時のまとめ ○挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ・ソーシャルスキルが上手にできるようになることが基本になることを伝える。 ・学習カードの使い方を説明し記入できるようにする。 ・健康観察を行う。 ・MTに注目するよう促す。

(3) 準備する物

三角コーン6、マーカー12、チームナンバー表示、ゼッケン6色×7枚、かご4、ソフトバレーボール40、掲示物(学習内容、流れなど)、CDデッキ、ラジオ体操CD、学習カード

【授業者による振り返り】

ペアラジオ体操の動きを、生徒たちはどんどん覚えてきた。毎時間抽出して指導する動きは1つだが、着実にできるようになってきている。覚えていないところについても、手本を見ながら行うことができている。特にBグループの生徒が、Aグループの生徒をサポートをする動きが増えてきたと思われる。

ラン&ネームパスでは、競技性が伴って、名前を呼んだり反応したりすることが前回よりもできるようになった。積み重ねることにより、ゲームにおいてもできるようになってくると思われる。

学習カードへの記述内容は、本時の学習内容を挙げたクラス(チーム)が多かった。

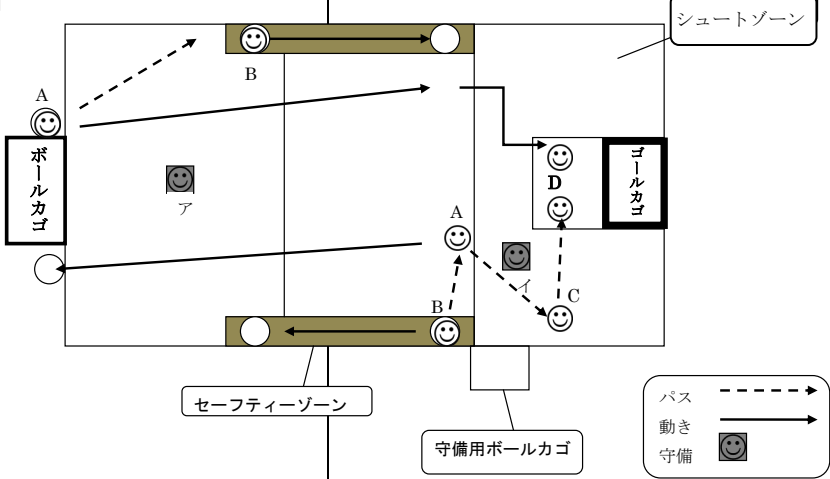
【本時の展開】（4／8時間）9月25日（金）

（1）本時のねらい

〈ねらい③〉仲間と動きを合わせることができるようにする。（Aグループ）

〈ねらい③〉仲間の特性を知り、リードすることができるようにする。（Bグループ）

（2）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立て
は じ め	1 集合・整列 ○挨拶 ○出席確認 2 本時の内容確認 【学習内容】しんげきのパスパスをやってみよう	<ul style="list-style-type: none"> ・チームごとにゼッケンを着けて並ぶよう促す。 ・生徒の出席確認、健康観察。 ・学習の始まりが意識できるように静かに注目させてから姿勢を正して挨拶ができるようにする。 ・活動に見通しが持てるように本時の学習内容とポイント、流れを掲示しておく。
15 分	3 準備運動 ○ペアラジオ体操	<ul style="list-style-type: none"> ・学年全体が活動についてくることができるよう音楽の速度を遅くして行う。
な か 25 分	4 【進撃のパスパス】 ○ルール説明 ○教員による手本 ○クラスごとに練習 ○ゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体に指示が通るようにゆっくり説明する。 ・生徒がわかるようにポイントを絞って説明する。 ・チームワークが大切なことを伝える。 ・生徒が入り乱れるので、安全を確認しながら進める。 ・動きがわからない部分が多いので、繰り返し行う。 ・教員が声をかける部分を、できるだけ生徒に声をかけさせる。

攻撃 😊

- 1 A(2人同時スタート)はBに名前を呼んでパスしシュートゾーンの手前まで走る。
- 2 パスをもらったBは目印(ケンステップ)に向かって走り、走ってきたAにパスを返す。
- 3 AとシュートゾーンにいるCは守備者にタッチされないようにパスし合い、ゴールマンであるDにパス。シュート後、Aスタート地点に戻る。
- 4 Dはキャッチできたら、ゴールカゴに入れる。

	<p>守備 😊</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 守備者アは、Aがボールを持ったらBにパスするのを防ぐ。2人いるので行ったり来たりする。 2 攻撃者がシュートゾーンに入ったら、守備者イは、シュートさせないようにする。その際ボール保持者にタッチできたら、防御成功とする。 3 ボール保持者にタッチできた場合は、ボールをもらい、「ボールカゴ」に返しに行く。 	
<p>ま と め 10 分</p>	<ol style="list-style-type: none"> 5 ソーシャルスキル振り返り <ul style="list-style-type: none"> ○いい挨拶の紹介・振り返り ○学習カードの記入（チームごと）、発表 6 本時のまとめと次時の確認 <ul style="list-style-type: none"> ○整理運動 ○本時のまとめ ○挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ・ソーシャルスキルが上手にできるようになることが基本になることを伝える。 ・学習カードの使い方を説明し記入できるようにする。 ・健康観察を行う。

（3）準備する物

三角コーン6、チームナンバー表示、ゼッケン6色×7枚、得点板、ソフトバレーボール40 掲示物（学習内容、流れなど）、CDデッキ、ラジオ体操CD、学習カード、安全バー4本、ボールカゴ4、ケンステップ6

【授業者による振り返り】

今回の授業では、最終ゲームを試しのゲームとして行った。全く新しいゲームであることから、説明することが多く、長時間になってしまったことを反省している。

説明後、クラスごとに練習を行ったが、実際のゲームを始めるまでに時間がかかった。STにもポイントを十分に伝えきれていなかったのが、困惑している様子が見られた。

実際のゲームでは、楽しそうにやっている生徒は多かったが、ルールが不十分な生徒も多かった。今後はルールを精選し、STへの共通理解を図らなければいけないと感じた。

【本時の展開】（5／8時間）9月29日（火）

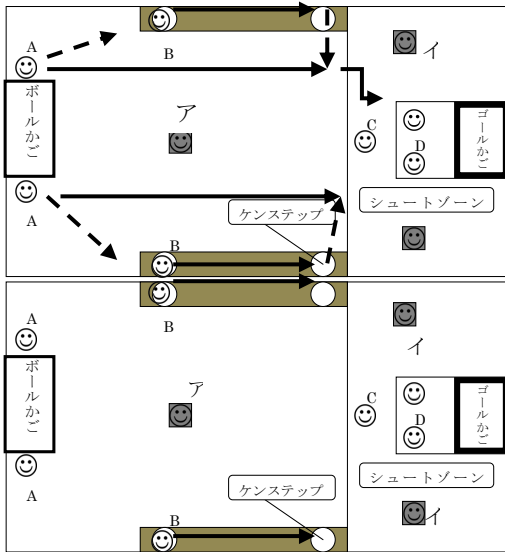
（1）本時のねらい

〈ねらい③〉仲間と動きを合わせることができるようになる。（Aグループ）

〈ねらい③〉仲間の特性を知り、リードすることができるようになる。（Bグループ）

（2）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立て
は じ め	<p>1 集合・整列</p> <ul style="list-style-type: none"> ○挨拶 ○出席確認 <p>2 本時の内容確認</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・チームごとにゼッケンを着けて並ぶよう促す。 ・生徒の出席確認、健康観察。 ・学習の始まりが意識できるように静かに注目させてから姿勢を正して挨拶ができるようにする。 ・活動に見通しが持てるように本時の学習内容とポイント、流れを掲示しておく。
15 分	<p>【学習内容】なかまのことをしてなかよくやろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ソーシャルスキルの教示 【一緒に動かないと】 【仲間のことを考えないと】 <p>3 準備運動</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ペアラジオ体操 	<ul style="list-style-type: none"> ・イラストや写真で、今回学習していくソーシャルスキル（コミュニケーション）が理解できるようにする。 ・学年全体が活動についてくることができるよう音楽の速度を遅くして行う。
な か か 25 分	<p>4 SSG【フープ de 玉入れ】</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・各チーム内で、Aグループの生徒とBグループの生徒がペアを作る。 ・作ったペア組が一つのフープに入り、MTの合図でスタート地点から安全バーの反対側へ移動する。 ・残っているチームの仲間がスタート地点のボールカゴからボールを取りだし、フープのペアにパスをする。 ・フープのペアは協力して、そのパスを受け、フロア中央のカゴにボールを入れる。その後、ペアでフープに入ったままスタート地点に戻る。 ・スタート地点に戻ったら、次のペアと交代する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別にサポートが必要な生徒には教員がつくが、ペアは生徒同士。 ・Bグループの生徒が、相手のことを考えているか、確認し、できていなければ、声をかける。 ・上手に声をかけ合っているペアがいれば、紹介する。 ・ボールを取る際にまわりとぶつからないよう、言葉かけをする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>SST</p> <p>①教示</p> <ul style="list-style-type: none"> 【一緒に動かないと】 【仲間のことを考えないと】 <p>②モデリング</p> <ul style="list-style-type: none"> 【相手のことを考える】 <p>③リハーサル</p> <ul style="list-style-type: none"> 【フープ de 玉入れ】 <p>④評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 【一緒に動いているか】 【相手に合わせて動けたか】 <p>⑤般化</p> <ul style="list-style-type: none"> 【進撃のパスパス】 </div>

	<p>5 【進撃のパスパス】</p> 	<ul style="list-style-type: none"> • 全体に指示が通るようにゆっくり説明する。 • 生徒がわかるようにポイントを絞って説明する。重要なのは『名前を呼んでからパスをすること』『反応すること』『相手に合わせて一緒に攻めること』『相手に合わせたパスをすること』 • チームワークが大切なことを伝える。 • 生徒が入り乱れるので、安全を確認しながら進める。 • 動きがわからない部分が多いので、繰り返し行う。 • 教員が声をかける部分を、なるべく生徒に声をかけさせる。
	<p>攻撃 😊</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 A(2人同時スタート)はBに名前を呼んでパスしシュートゾーンの手前まで走る。 2 パスをもらったBは目印(ケンステップ)に向かって走り、走ってきたAにパスを返す。 3 AとシュートゾーンにいるCは守備者にタッチされないようにパスし合い、ゴールマンであるDにパス。シュート後、Aスタート地点に戻る。 4 Dはキャッチできたら、ゴールカゴに入れる。 <p>守備 😊</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 守備者アは、Aがボールを持ったらBにパスするのを防ぐ。2人いるので、行ったり来たりする。 2 攻撃者がシュートゾーンに入ったら、守備者イは、シュートさせないようにする。その際ボール保持者にタッチできたら、防御成功とする。 3 ボール保持者にタッチできた場合は、ボールをもらい、「ボールカゴ」に返しに行く。 	
<p>ま と め</p> <p>10 分</p>	<p>6 ソーシャルスキル振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ○いい挨拶の紹介・振り返り ○学習カードの記入(チームごと)、発表 <p>7 本時のまとめと次時の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ○整理運動 ○本時のまとめ ○挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> • ソーシャルスキルが上手にできるようになることが基本になることを伝える。 • 学習カードの使い方を説明し記入できるようにする。 • 健康観察を行う。 • MTに注目するよう促す。

(3) 準備する物

三角コーン10、チームナンバー表示、ゼッケン6色×7枚、得点板、ソフトバレーボール40
 掲示物(学習内容、流れなど)、CDデッキ、ラジオ体操CD、学習カード、安全バー4本、
 ボールカゴ4、ケンステップ6

【授業者による振り返り】

今回の授業では、SSGとして「フープ de 玉入れ」を行った。フープに二人一組で入り、動きを合わせながら玉入れを行うというものであり、説明もルールもわかりやすかったと思われる。生徒たちは、意思統一を図って一緒に動く必要があり、1つのボールを二人でキャッチすることが求められたが、合図を出し合ったり、声をかけ合いながら、取り組むことができていた。

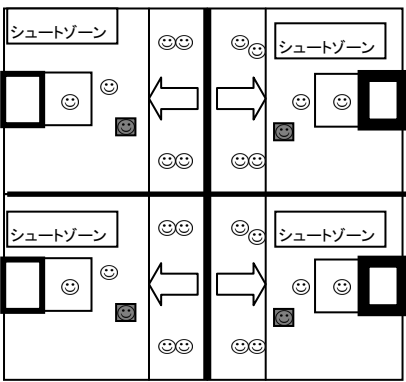
【本時の展開】（6／8時間）10月2日（金）

（1）本時のねらい

- 〈ねらい④〉 やさしく相手に触れることができるようにする。（Aグループ）
- 〈ねらい④〉 相手の気持ちを考え、やさしく相手に触れることができるようにする。（Bグループ）

（2）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立て
は じ め	<p>1 集合・整列</p> <ul style="list-style-type: none"> ○挨拶 ○出席確認 <p>2 本時の内容確認</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・チームごとにゼッケンを着けて並ぶよう促す。 ・生徒の出席確認、健康観察。 ・学習の始まりが意識できるように静かに注目させてから姿勢を正して挨拶ができるようにする。 ・活動に見通しが持てるように本時の学習内容とポイント、流れを掲示しておく。
15 分	<p>【学習内容】 あいてのきもちをかんがえてやさしくタッチしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ソーシャルスキルの教示 【強く叩くと】 【相手の気持ちを考えないと】 <p>3 準備運動</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ペアラジオ体操 	<ul style="list-style-type: none"> ・イラストや写真で、今回学習していくソーシャルスキル（コミュニケーション）が理解できるようにする。 ・学年全体が活動についてくることができるよう音楽の速度を遅くして行う。
な か	<p>4 SSG【タッチリレー】</p> <p>各チームAグループとBグループの生徒が交互になり、一定の間隔を開けて並ぶ。</p> <p>よーいドンで、自分の前にいる人に向かって走っていき肩にタッチをする。</p> <p>タッチされた人は同様に走っていき、前にいる人にタッチをする。</p> <p>先頭の人が出たらラインを越えたら終了。</p> <p>「タッチが痛くなかったか？」を確認し、痛かった場合、2回戦に向けて各チームで、たたき方を確認する。</p> <p>2回戦を行う中で痛くないようにタッチすることができるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・個別にサポートが必要な生徒には教員がつくが、ペアは生徒同士。 ・Bグループの生徒が、相手のことを考えているか、確認し、できていなければ、声をかける。 ・上手に声をかけあっているペアがいれば、紹介する。 ・タッチする際に前の人にぶつからないよう、前の人をよけながらタッチさせる。 <p>SST</p> <p>①教示</p> <ul style="list-style-type: none"> 【強く叩くと】 【相手の気持ちを考えないと】 <p>②モデリング</p> <ul style="list-style-type: none"> 【優しく触れる】 <p>③リハーサル</p> <ul style="list-style-type: none"> 【タッチリレー】 <p>④評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 【優しく速くタッチができたか】 <p>⑤般化</p> <ul style="list-style-type: none"> 【進撃のパスパス】
25 分		

	<p>5 【進撃のパスパス分解練習】</p> 	<p>○4か所でゴール付近の攻防の分解練習。 ※相手の守りによって判断する ※守りは教員が行う。 Aの生徒 ①シュートゾーン入って自分でシュート Bの生徒 ①シュートゾーン入って自分でシュート ②シュートゾーンに入らず、味方にパス</p>
	<p>6 【進撃のパスパス】</p> <p>ゲーム順</p> <p>①5組 対 1組 ④1組 対 3組 ②2組 対 3組 ⑤2組 対 4組 ③4組 対 5組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・役割の場所は固定する。誰がどこをやるのか、予め待機中に決めておく。 ・ゲーム時間を確保したいので、素早い移動を促す。 ・個別指導を行う教員と、クラス全体に指示する教員1人以外は、コートの中に入り、ルール理解や動きが難しい生徒の声かけやサポートをする。
<p>まとめ</p> <p>10分</p>	<p>7 ソーシャルスキル振り返り</p> <p>○いい挨拶の紹介・振り返り</p> <p>○学習カードの記入（チームごと）、発表</p> <p>8 本時のまとめと次時の確認</p> <p>○整理運動</p> <p>○本時のまとめ</p> <p>○挨拶</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ソーシャルスキルが上手にできるようになることが基本になることを伝える。 ・学習カードの使い方を説明し記入できるようにする。 ・健康観察を行う。 ・MTに注目するよう促す。

(3) 準備する物

三角コーン6、チームナンバー表示、ゼッケン6色×7枚、得点板、ソフトバレーボール40
 掲示物（学習内容、流れなど）、CDデッキ、ラジオ体操CD、学習カード。

【授業者による振り返り】

ペアラジオ体操では、相手のことを理解し相手に合わせようとする動きが増えてきている。動きを覚えていないところがあると、互いに教え合っているペアも出てきた。これらの様子から「友達と協力すること」に大変有効であったと考える。

タッチリレーでは、「よーいドン」のかけ声に反応し、競技性に伴って強くたたきすぎたり、次の人を押してしまう生徒がいた。しかし、自分たちの中に「痛い」という自覚がなく、タッチの強さの比較が難しかった。

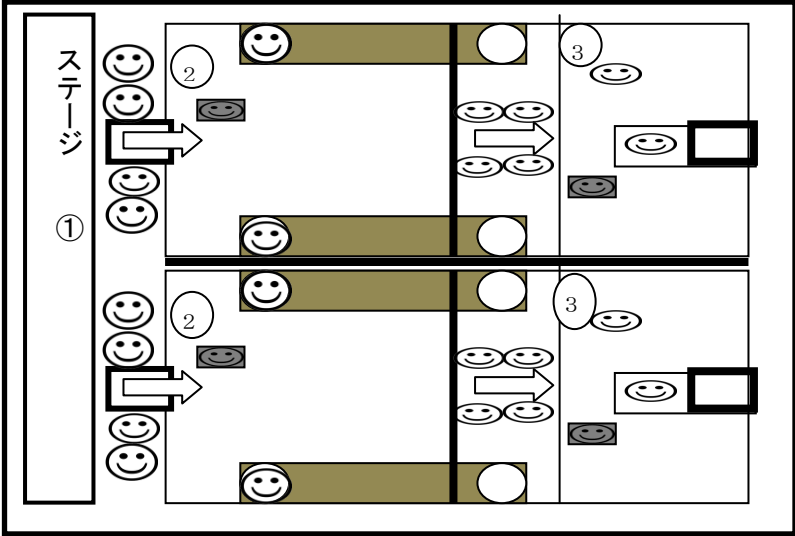
「進撃のパスパス」の分解練習では、担任が中心となり、細やかな指導をしていた。分解練習により、ゲームでのパスの成功率もあがっている様子が見られた。

【本時の展開】（7／8時間）10月6日（火）

（1）本時のねらい

〈ねらい⑥〉仲間とコミュニケーションをとりながら楽しむことができるようにする。

（2）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立て
は じ め	1 集合・整列 ○挨拶 ○出席確認 2 本時の内容確認 【学習内容】なかまときょうりょくしてゲームをたのしもう	・チームごとにゼッケンを着けて並ぶよう促す。 ・生徒の出席確認、健康観察。 ・学習の始まりが意識できるように静かに注目させてから姿勢を正して挨拶ができるようにする。 ・活動に見通しが持てるように本時の学習内容とポイント、流れを掲示しておく。
15 分	3 準備運動 ○ペアラジオ体操	・学年全体がついてくることができるよう、ゆっくり行う。
な か 25 分	4 【進撃のパスパス分解練習】 ○説明を聞く ○手本を見る。 パス練習について スタート練習について ○5か所に分かれて 分解練習を行う。	 <p>①パスのみの練習・②スタートの練習・③ゴール付近の攻防の練習を行う。 ↓練習を進める教員</p> <p>①□パスのみ練習（ステージ）：担任 t（練習の進行役） ■守りがいないときのパス ■守りがいるときに頭上を通すパス。</p> <p>② スタートの練習（真ん中まで）：担任 t（練習の進行役）・國武 t ■パスを出して早く真ん中まで持っていく練習。</p> <p>③ゴール付近の攻防（真ん中から）：山口 t・鈴木 t ■線の中に入っていき、自分でシュート ■線の外から味方にパス。</p> <p style="text-align: right;">※守りはST。</p>

	<p>5 【進撃のパスパス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラス対抗リーグ戦 <p>※試合間に作戦タイムをとる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・役割の場所は1試合の中では固定する。誰がどこをやるのか、予め待機中に決めておく。 ・ゲーム時間を確保したいので、素早い移動を促す！ ・作戦タイムでは、作戦カードを使って話し合いの指導をする。 ・個別指導を行う教員と、クラス全体に指示する教員1人以外は、コートの中に入り、ルール理解や動きが難しい生徒の声かけやサポートをする。 ・見ている生徒には、拍手、応援をして盛り上げるよう促す。
<p>ま と め 10 分</p>	<p>6 ソーシャルスキル振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ○いい挨拶の紹介・振り返り ○学習カードの記入（チームごと）、発表 <p>7 本時のまとめと次時の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ○整理運動 ○本時のまとめ ○挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ・ソーシャルスキルが上手にできるようになることが基本になることを伝える。 ・学習カードの使い方を説明し記入できるようにする。 ・健康観察を行う。 ・MTに注目するよう促す。

（3）準備する物

三角コーン6、チームナンバー表示、ゼッケン6色×7枚、得点板、ソフトバレーボール40
 掲示物（学習内容、流れなど）、CDデッキ、ラジオ体操CD、学習カード、ボールカゴ4、
 ケンステップ6

【授業者による振り返り】

本時は時間調整を意識して取り組んだ。

「分解練習」では、要点を簡潔に説明し、生徒たちはわかりやすかったと思う。しかし、自分で用意した表示をうまく使うことができなかった。また、生徒たちは時間で区切って、練習場所を移動することが理解できず、移動の指示を整理することが必要であった。

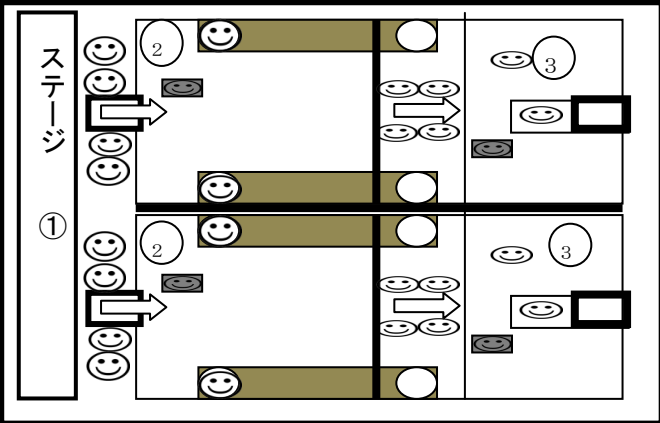
「進撃のパスパス」では、対戦表を掲示しておくことで、進行がスムーズであった。しかしゲーム中、ルールを間違えた生徒がいたときに、その場で指導する教員がいなかった。そのため、ルールを間違えたまま理解している生徒が何度も同じ間違いを繰り返し、後から指導しても修正することが難しかった。

【本時の展開】（8／8時間）10月9日（金）

（1）本時のねらい

〈ねらい⑤〉 仲間とコミュニケーションをとりながら楽しむことができるようにする。

（2）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立て
は じ め 15 分	1 集合・整列 ○挨拶 ○出席確認 2 本時の内容確認 【学習内容】 なかまときょうりょくしてゲームをたのしもう	<ul style="list-style-type: none"> ・チームごとにゼッケンを着けて並ぶよう促す。 ・生徒の出席確認、健康観察。 ・学習の始まりが意識できるように静かに注目させてから姿勢を正して挨拶ができるようにする。 ・活動に見通しが持てるように本時の学習内容とポイント、流れを掲示しておく。
	3 準備運動 ○ペアラジオ体操	<ul style="list-style-type: none"> ・学年全体がついてくることができるよう、ゆっくり行う。
な か 25 分	4 【進撃のパスパス分解練習】 ○説明を聞く ○手本を見る。 パス練習について スタート練習について ○5か所に分かれて分解練習を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・全体に指示が通るようにゆっくり説明する。 ・生徒がわかるようにポイントを絞って説明する。 ・チームワークが大切なことを伝える。 ・生徒が入り乱れるので、安全を確認しながら進める。 ・教員が声をかける部分を、できるだけ生徒に声をかけさせる。
		5 【進撃のパスパス】 ○説明を聞く ・リーグ戦

	進撃のパスパス リーグ戦					
	1組	2組	3組	4組	5組	
1組	△ 8-8	○ 9-7				
2組	x 7-9			△ 9-9		
3組					○ 12-8	
4組		△ 9-9				
5組	△ 8-8		x 8-12			

ゲーム順	
3組 対	4組
2組 対	5組
1組 対	4組
2組 対	3組
4組 対	5組
1組 対	3組

ま と め 10 分	<p>6 ソーシャルスキル振り返り ○いい挨拶の紹介・振り返り ○学習カードの記入（チームごと）、発表</p> <p>7 本時のまとめと次時の確認 ○整理運動 ○本時のまとめ ○挨拶</p>	<p>し合いの指導をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 個別指導を行う教員と、クラス全体に指示する教員1人以外は、コートの中に入り、ルール理解や動きが難しい生徒の声かけやサポートをする。 見ている生徒には、拍手、応援をして盛り上げるよう促す。 <p>・ソーシャルスキルが上手にできることが基本になることを伝える。</p> <p>・学習カードの使い方を説明し記入できるようにする。</p> <p>・健康観察を行う。</p>
----------------------------	---	---

（3）準備する物

三角コーン6、チームナンバー表示、ゼッケン6色×7枚、得点板、ソフトバレーボール40
 掲示物（学習内容、流れなど）、CDデッキ、ラジオ体操CD、学習カード、ボールカゴ4、
 ケンステップ6

【授業者による振り返り】

最終授業となり、ペアラジオ体操がとても上達していた。前回少し気持ちが緩んでしまっていたので、今回の授業で「大きく動く」と言葉かけたことがよかったのではないかと感じた。分解練習は担任の教員に任せて行ったが、とてもスムーズであった。

生徒たちがゲームの流れに乗り、楽しそうに取り組む様子が見られた。全6試合を授業時間内で実施するためには、得点の教え方を簡略化する必要があった。試合数を消化することに気をとられていたため、生徒への説明や指示の言葉が速くなったことは、反省しなくてはならない。

4 検証授業の結果と考察

研究主題に迫るために、検証授業から得られたデータをもとに、分析の視点と方法〔第3章 1 - (7)〕に沿って分析し、検証授業を通して人間関係形成能力に着目した集団的スポーツを学ぶ体育授業が、仲間と協力して運動する態度やコミュニケーションを必要とする技能を向上させることに有効であったかを考察していくこととする。

(1) 人間関係形成能力の育成

ア 生徒の人間関係形成能力は育成されたか

(ア) コミュニケーションの基礎的能力に係る評価の変化

「コミュニケーションの基礎的能力に係る評価」を検証授業の事前と事後に実施した。但し、事前と事後の評価時に満点を示した19人については除いた。

評価の結果、事前よりも事後において、数値が上がった項目数が下がった項目数を上回った生徒を「アップ」、それ以外を「変化なし」とし、その人数を集計した。

表3-1 コミュニケーションの基礎的能力に係る評価シート集計生徒数(単位:人)

	「アップ」	「変化なし」	集計生徒数
人間関係の形成に関する項目	15	7	22
コミュニケーションの基礎的能力に関する項目	13	9	
身体の動きに関する項目	17	5	
全項目	15	7	

※「全項目」とは、それぞれの評価の変化(「アップ」あるいは「変化なし」)について集計した。

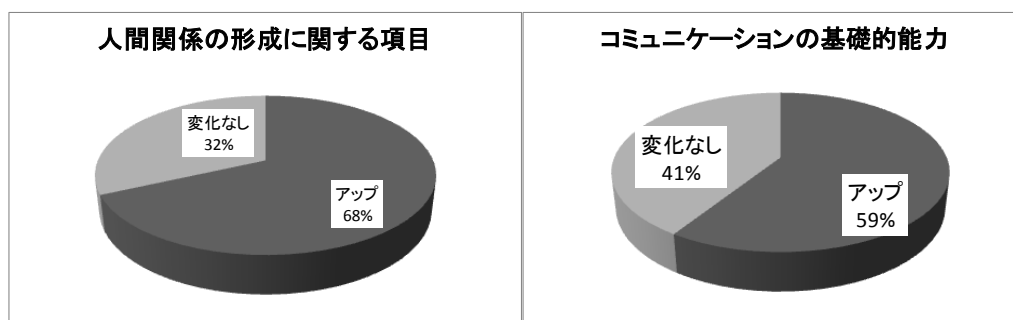


図3-1 人間関係の形成に関する項目 (n=22)

図3-2 コミュニケーションの基礎的能力に関する項目 (n=22)

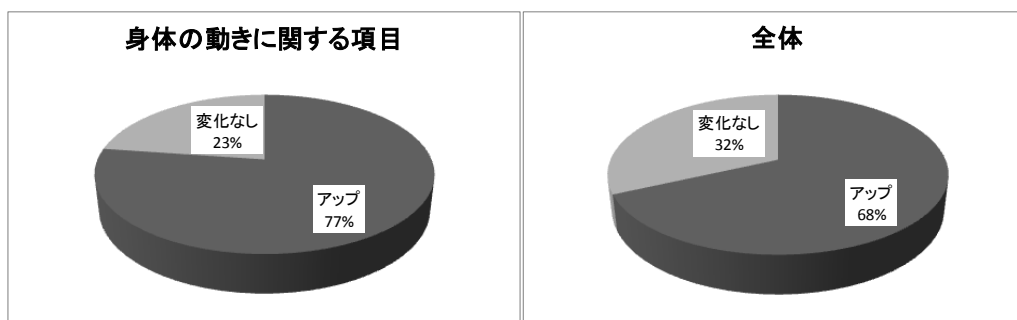


図3-3 身体の動きに関する項目 (n=22)

図3-4 全項目 (n=22)

<結果>

図3-1は、「人間関係の形成に関する項目」において、「アップ」を示した生徒の結果をグラフにしたものである。「アップ」を示したのが、68%であった。

図3-2は、「コミュニケーションの基礎的能力に関する項目」において、「アップ」を示した生徒の結果をグラフにしたものである。「アップ」を示したのが、59%であった。

図3-3は、「身体の動きに関する項目」において、「アップ」を示した生徒の結果をグラフにしたものである。「アップ」を示したのが、77%であった。

図3-4は、「全項目」において、「アップ」を示した生徒の結果をグラフにしたものである。「アップ」を示したのが、68%であった。

<考察>

これらの結果から、「コミュニケーションの基礎的能力に係る評価」の対象となった22人の生徒の多くは検証授業を通して、コミュニケーションの基礎的能力が向上したと考えられる。そのうち、「人間関係の形成に関する項目」についても多くの生徒の評価の向上が見られたことにより、今回の検証授業は、生徒の人間関係形成能力の育成に有効だった。

また、「身体の動きに関する項目」の評価が向上している生徒が非常に多いことから技能の面からも本授業の学習活動が有効であったと考える。

「変化なし」という結果が出た生徒は、生徒同士でのかかわりが受け身であったため、変化がないように見えたが、実際に仲間とかかわる場面では、今までかかわる機会が少なかった仲間とかかわる場面が見られた。

【抽出生徒の評価の変化について】

抽出生徒のAさんとBさんは、普段の体育の授業ではAグループで活動し、教員の直接的な支援（身体に触れての支援であり、言葉かけのみによる支援は除く）がなくては活動することが難しい生徒である。

図3-5、図3-6は、抽出生徒AさんとBさんについて、学級担任が3名で評価した「コミュニケーションの基礎的能力の評価シート」において、人間関係形成能力に係ると思われる「人間関係の形成に関する項目」と「コミュニケーションの基礎能力」の2項目それぞれの合計点数を、検証授業の事前と事後で比較したグラフである。

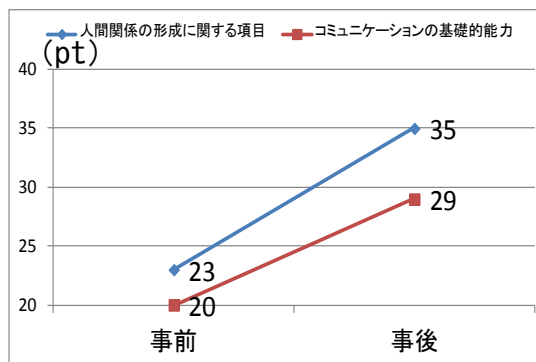


図3-5 Aさん「人間関係の形成に関する項目」と「コミュニケーションの基礎的能力」の事前と事後の評価の変化

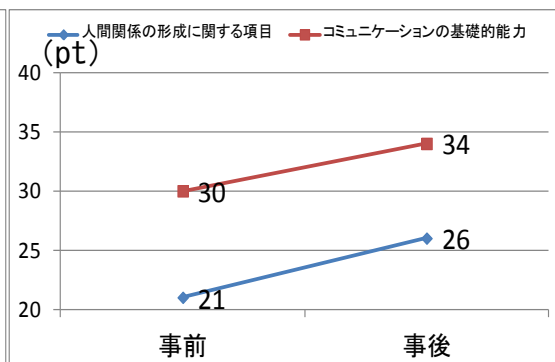


図3-6 Bさん「人間関係の形成に関する項目」と「コミュニケーションの基礎的能力」の事前と事後の評価の変化

<結果>

Aさんは、「人間関係の形成に関する項目」で12pt「コミュニケーションの基礎能力」9ptの上昇が見られた。また、Bさんは、それぞれ5ポイントと4ポイントの上昇が見られた。

<考察>

これらの結果から、Aグループの生徒にとって、今回の検証授業での活動は、コミュニケーションの基礎的能力を高めるのに有効に働いたと考える。実際の授業場面では、指導にあたる教員間で「友達と協力する」というねらいを共通理解していたことで、生徒同士のかかわりを大切にしながら進められていた。そのため、Bグループの生徒が積極的にAグループの生徒の支援を行い、それをAグループの生徒が受け入れることによって、生徒同士のコミュニケーションが図られていた。その結果、特定の教員とのかかわりだけではなく、コミュニケーションの幅が広がり、それに伴って、コミュニケーションの基礎的能力が上昇していったものと考えられる。また、SSTにより生徒同士の具体的なかかわり方を学び、SSGでそれを実践したことで、コミュニケーションの具体的な手法も学ぶことができたこともその要因であったと考える。

(イ) ソーシャルスキル尺度による評価の変化

先述の「コミュニケーションの基礎的能力に係る評価」において満点を示した19人に対して「ソーシャルスキル尺度による評価」を検証授業の事前と事後に実施した。事後においては、2人の生徒が「コミュニケーションの基礎的能力に係る評価」において新たに満点を示し、本尺度による評価が可能と判断し、計21人の集計となっている。

評価の結果、事前よりも事後において、数値が上がった項目数が下がった項目数を上回った生徒を「アップ」とし、その人数を集計した。

表3-2 ソーシャルスキル尺度による評価の集計生徒数（単位：人）

	「アップ」	「変化なし」 もしくは 「ダウン」	集計生徒数
集団行動に関する項目	13	8	21
セルフコントロールに関する項目	12	9	
仲間関係スキルに関する項目	13	8	
コミュニケーションスキルに関する項目	14	7	

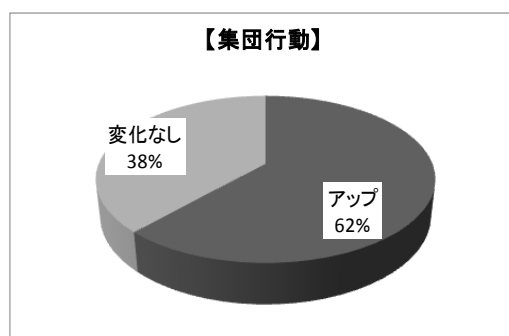


図3-7 集団行動に関する項目 (n=21)

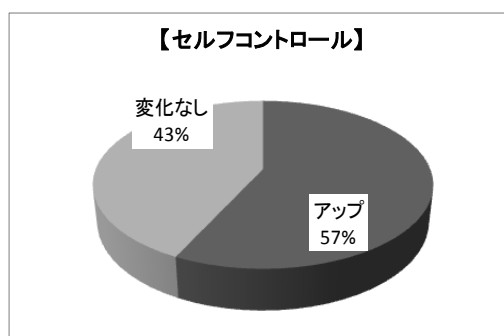


図3-8 セルフコントロールに関する項目 (n=21)

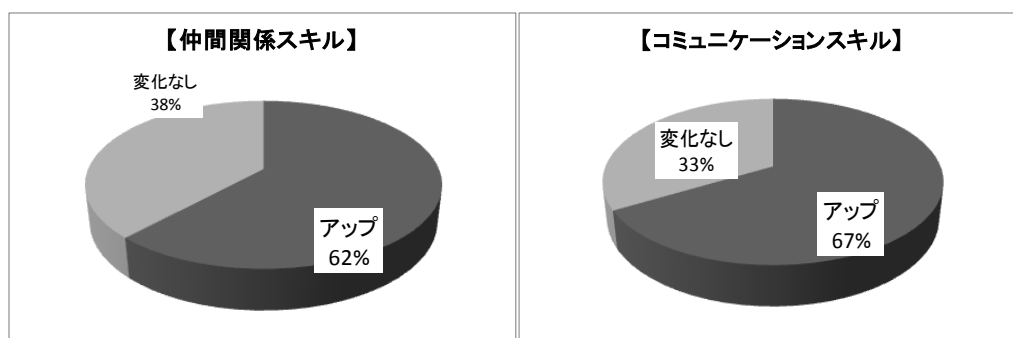


図 3-9 仲間関係スキルに関する項目 (n=21) 図 3-10 コミュニケーションスキルに関する項目 (n=21)

<結果>

図 3-7 は、「集団行動に関する項目」において、「アップ」を示した生徒の結果をグラフにしたものである。「アップ」を示したのが、62%であった。

図 3-8 は、「セルフコントロールに関する項目」において、「アップ」を示した生徒の結果をグラフにしたものである。「アップ」を示したのが、57%であった。

図 3-9 は、「仲間関係スキルに関する項目」において、「アップ」を示した生徒の結果をグラフにしたものである。「アップ」を示したのが、62%であった。

図 3-10 は、「コミュニケーションスキルに関する項目」において、「アップ」を示した生徒の結果をグラフにしたものである。「アップ」を示したのが、67%であった。

<考察>

これらの結果から、「ソーシャルスキル尺度による評価」の対象となった 21 人の生徒の多くが検証授業を通して、ソーシャルスキルが向上し、生徒の人間関係形成能力の育成に効果がみられた。

「コミュニケーションの基礎的能力に係る評価」の対象となった 22 人の生徒よりも、向上した割合が低かったのは、ソーシャルスキル尺度が「小学生向け」であったため、事前調査の段階から高い評価を得ていた生徒が多かったためであると考えられる。

【抽出生徒の評価の変化について】

抽出生徒の C さんと E さんは、普段の体育の授業では B グループで活動し、自分から働きかけることが難しく、働きかけることができたとしてもトラブルになることがあった生徒である。

図 3-11、図 3-12 は抽出生徒 C さんと D さんについて、学級担任が 3 名で評価した「ソーシャルスキル尺度による評価」において、人間関係形成能力に係ると思われる「集団行動に関する項目」「仲間関係スキルに関する項目」「コミュニケーションスキルに関する項目」の 3 項目それぞれの合計点数を、検証授業の事前と事後で比較したグラフである。

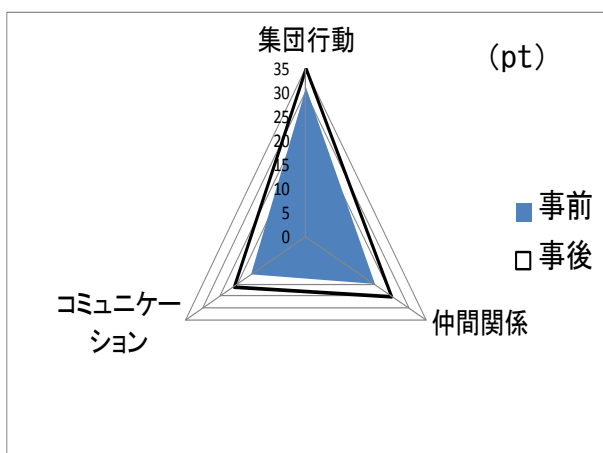


図3-11 Cさんの「集団行動」「仲間関係スキルに関する項目」「コミュニケーションスキルに関する項目」に関する項目の事前と事後の評価の変化

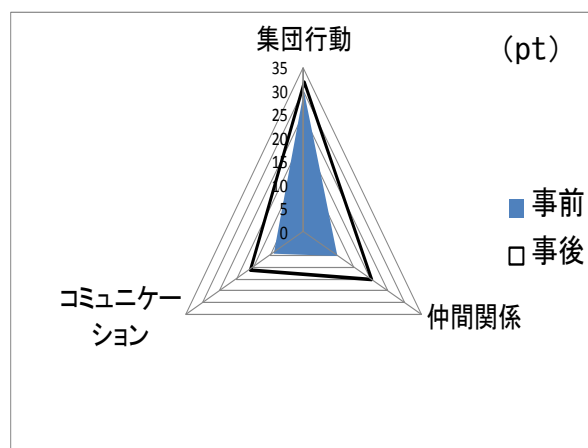


図3-12 Dさんの「集団行動」「仲間関係スキルに関する項目」「コミュニケーションスキルに関する項目」に関する項目の事前と事後の評価の変化

<結果>

Cさんは、すべての項目において5pt 前後上昇した。Dさんも、全体的に上昇したが、特に「仲間関係」で10pt 以上の上昇が見られた。

<考察>

これらの結果から、Bグループの生徒にとって、今回の検証授業での活動は、生徒の人間関係形成能力の自他の理解能力を高め、「友達と協力する」ことを学ぶ活動として有効に働いたと考える。実際の授業場面では、Bグループの生徒が、積極的にリーダーとなり、どのようにしたらAグループの生徒とかかわって、楽しく活動できるかを考えながら働きかけをしている場面が多く見られた。また、チームの話合いの場面では、Aグループの生徒の反応を辛抱強く待っていたり、Aグループの生徒が自分の意見を表現しやすいようにヒントを与えたりしている場面が多く見られた。さらに、学習カード(チームカード)の記述欄にも、「友達と一緒に上手にできてよかった」などといった記述が見られた。

(ウ) 生徒の取組姿勢の変化 [学習カード(チームカード)から]

感想の記述欄に書かれている人間関係形成能力に係る用語の変化

ペアラジオ体操とSSGおよび進撃のパスパスについて、毎時間、学習カード(チームカード)にその感想を記述する欄を設けた。表3-3はその表現の変化をまとめたものである。

表 3-3 学習カード（チームカード）の感想の記述欄に書かれた内容の変化（自由記述）

ペアラジオ体操で協力してできたところはどこですか		
手をつないでひっぱるところ	→	むずかしいところを協力してできた
練習したことができてよかった		手をつないでまわるところ
途中で楽しくなってきた		今までよりも協力できた
ペアラジオ体操で楽しかったところはどこですか		
ひねりの動き	→	むずかしいところを協力してできた
グルグルまわるところ		いきがあった
りょうあしジャンケン		手ぶらぶらが相手がいる気持ちいい
		相手のことを考えてできたこと
SSG&進撃のパスパスで協力してできたところはどこですか		
歩いている人がいたらまつ	→	お互い息を合わせてできた 声をかけあったこと
名前を呼んだあと、待つことができた		名前を呼んだことと 優しくパスをするように気がつけた
やさしくパスできた		パスをつないで走ったこと 負けても楽しかった
SSG&進撃のパスパスで楽しかったところはどこですか		
名前を呼んだら振り向いてもらえた	→	みんなで全力でできた
ゲームが楽しかった。走ったこと。		パスをもらうのがたのしかった
名前を呼んでボールを渡せたこと		チームで分かり合えたことクラスの一体感
ボールをなげる		一生懸命走った。名前を呼んでパスできた

<結果>

当初は、協力して取り組むことは理解しているものの、「手をつないでひっぱるところ」「ひねりの動き」「歩いている人がいたら待つ」などといった動作を中心とした表現が多く見られた。しかし、それが検証授業が進むにつれて、「いきがあった」「手ぶらぶらが相手がいる気持ちいい」「パスをもらうのが楽しかった」などといった協力することによって生まれる気持ちの変化について表現しているものが見られるようになった。

<考察>

これらの結果から、生徒たちは「協力＝一緒に動くこと」という発想から、「協力＝気持ちがいい」といった感情面で捉えることができるように変化したと考える。実際の授業においても、ペアラジオ体操では、相手に負担をかけ過ぎないようにリードしたり、SSGや進撃のパスパスでは仲間からの励ましに対し、笑顔で応えたりする場面が多く見られるようになった。

(エ) 検証授業の効果として考えられる生徒の変容

検証授業を実施した藤沢養護学校高等部2学年全教員を対象に行った事後アンケートにより、友達とのかかわりなどで生徒の変容があったかを調査した。

事後アンケート

「人間関係形成能力（自他の理解能力、コミュニケーション能力）に着目した球技：ゴール型の授業を検証授業で行わせていただきました。授業や日常生活において、友達とコミュニケーションをよく取るようになった、友達と協力することに抵抗感が減ったなど、生徒の変容がありましたら、教えていただきたいので、是非ご記入ください。」

表3-4 事後アンケート 検証授業後の生徒の変容（自由記述）

自由記述(抜粋)
生徒達には毎回の内容が理解しやすく、積極的にやる気を見せて活動していたように思います。
本来持っている思いやりの心や相手のことを手助けする面が短い時間でしたが表面、行動に出せるようになった生徒がいました。ルール面ではちょっと指示が多かった気もします。理解できる生徒とできない生徒のギャップを感じました。
準備体操を進んでやるようになった生徒がいて、友達と一緒に活動することの楽しさを学べたのではないかと感じた。友達の名前を呼び、それに応える態度も相手をよく見る(観察する)きっかけになったようです。
授業の中での友達への言葉かけが増えた。相手に対して優しいパスをしようとか、声をかけようとする意識が見られた。体育の振り返りで意見が出るようになった。
普段の体育の授業では、High・Lowに分かれて行っているの、運動する際にHighGの生徒が思いやりのある言葉かけをしたり、LowGの生徒が精一杯の力を出している姿が新鮮で、「名前を呼ぶ」だけでなく身振りでも、コミュニケーションを図っていたことが印象に残った。
日常ではクラスメイトでもほとんどかかわりがみられなかった生徒が、授業ではかかわる様子が見られた。
楽しそうに体育をする生徒の姿が印象的でした。苦手な生徒も一緒に、協力することの大切さが分かったと思います。

<結果>

表3-4は、教員向けの事後アンケートにより、検証授業後、授業や日常生活において、友達とのかかわりなどで生徒の変容があったかを調査した結果である。検証授業後、保健体育の授業において、今までかかわりの少なかった生徒同士のかかわる様子が見られるようになったと言える。

<考察>

これらの結果から、検証授業を通して、今までかかわりが少なかった学年の仲間と協力した経験を通し、かかわり方の変化が見られるようになったと考える。特に、SSTによって、具体的にどのようなかかわり方をすれば良いのかを学んだことが、このような結果に影響したのではないかと考える。

イ 人間関係形成能力の育成に関する教員の意識が変化したか

(ア) 人間関係形成能力の育成について

藤沢養護学校高等部の全教員を対象に事前アンケートを実施した。キャリア教育の4能力の中で、就職の決め手となる能力として着目されている「人間関係形成能力」を普段の学校生活の中のどの場面で意識して育成しているかを捉えた。

事前アンケート

「『人間関係形成能力』を高めることをねらいとする授業を、現在、どの教科、領域等で行っていますか。」

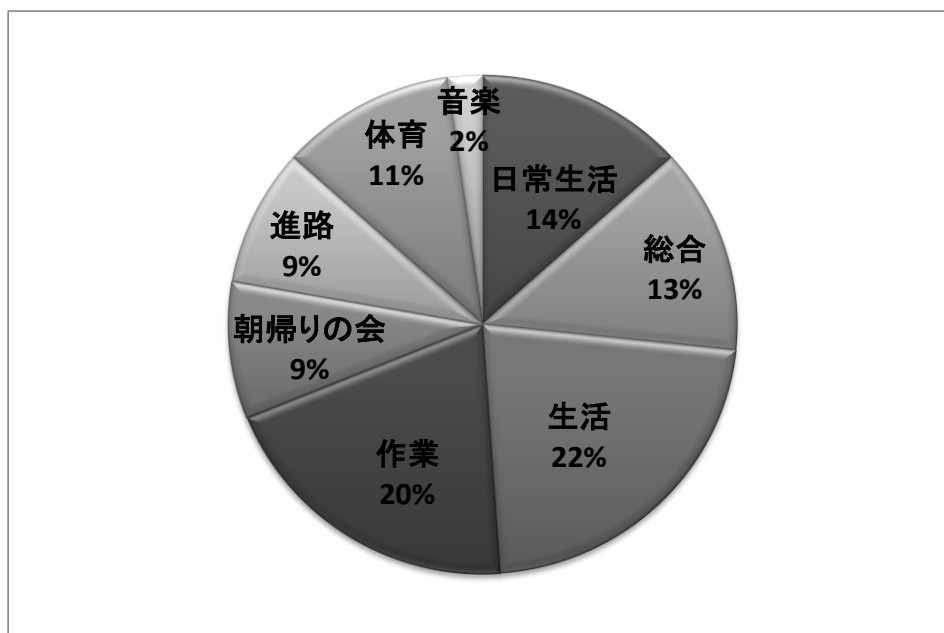


図3-13 「人間関係形成能力」を高めることをねらいとしている教科・領域（複数回答）
(n=45)

<結果>

図3-13は、「人間関係形成能力」を、教員が普段どの場面で意識して育成しているかを示したグラフである。「生活」「作業」「日常生活」「総合的な学習」といった領域的な場面で取り組まれていた。一般的な教科としては、「体育」「音楽」で取り組まれていた。

<考察>

これらの結果から、「人間関係形成能力の育成」は、より社会生活に近い学習活動の場面で取り組まれていると言える。これは、具体的な場面で取り組むことにより、ねらいが生徒に定着しやすいからであると考ええる。

また、「体育」「音楽」といった教科においては、一人で取り組む場面だけでなく、仲間と取り組む場面も多く見られることから、「人間関係形成能力」を高められると捉えられていると考えられる。特に、「体育」においては、社会生活に近い学習活動と同様に、その育成を期待することができると言える。

(イ) 保健体育授業に対する考え方の変化

a 保健体育授業において「ねらい」としていること

藤沢養護学校高等部の全教員を対象に事前アンケートにより、保健体育の授業に関する意識調査を実施した。

表 3-5 事前アンケートの標本数 (単位: 人)

	第1学年	第2学年	第3学年	高等部全体
在籍	16	15	17	48
未提出数	2	1	0	3
提出数	14	14	17	45

事前アンケート

「現在、御自身が行っている (かかわっている) 『保健体育 (体育実技) 』はどのような授業だと思いますか。」

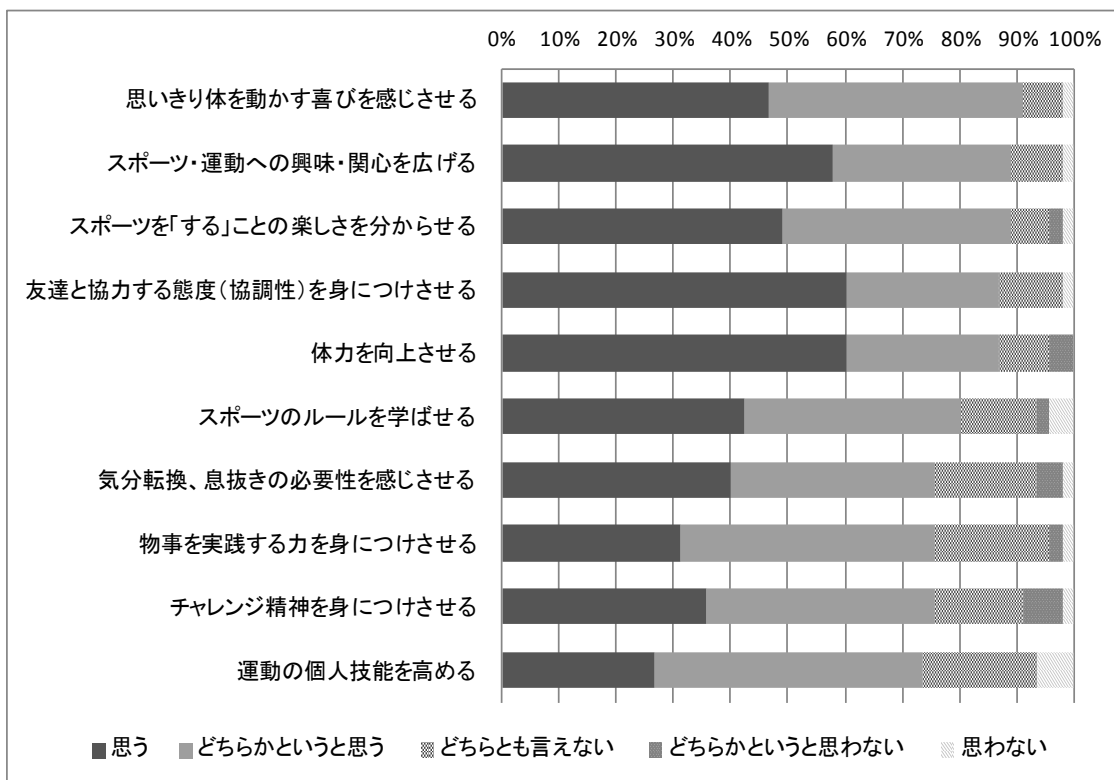


図 3-14 (1) 保健体育授業のねらい (n=45)

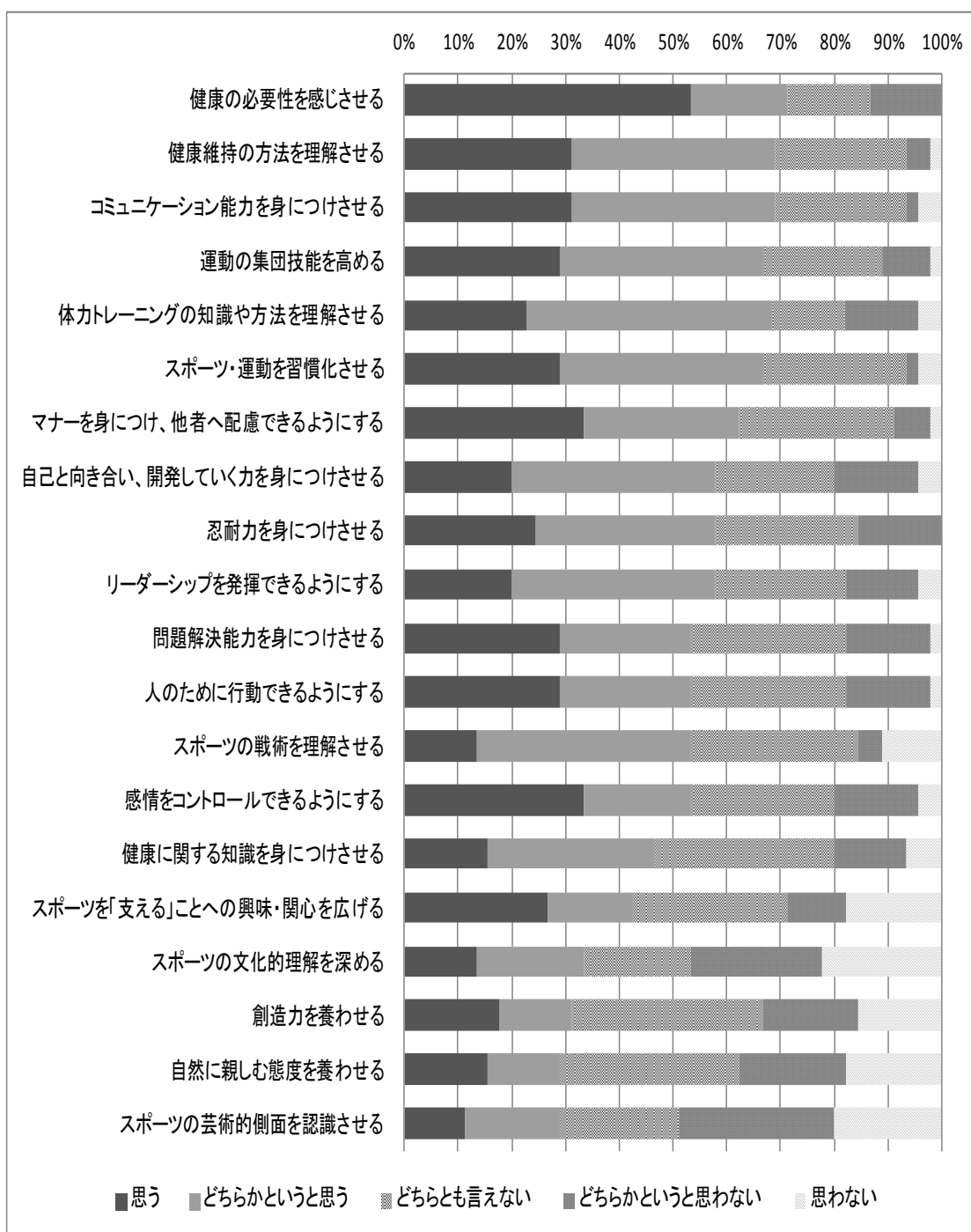


図 3-14 (2) 保健体育授業のねらい (n=45)

<結果>

図 3-14 は、保健体育の授業をどのようなねらいで取り組んでいるかの結果を示したグラフである。「思いきり体を動かす喜びを感じさせる」(91%)、「スポーツ・運動への興味・関心を広げる」(88%)、「スポーツを『する』ことの楽しさを分らせる」(88%)「友達と協力する態度(協調性)を身につけさせる」(86%)「体力を向上させる」(86%)の項目について、教員がねらいとして肯定的に捉えていた。一方、「スポーツの芸術的側面を認識させる」(28%)「自然に親しむ態度を養わせる」(28%)「創造力を養わせる」(32%)「スポーツの文化的理解を深める」(34%)「スポーツを『支える』ことへの興味・関心を広げる」(42%)「健康に関する知識を身につけさせる」(46%)の項目については、教員がねらいとして捉えている率は少なかった。

<考察>

これらの結果から、教員は生徒たちに運動・スポーツの楽しさを味わわせつつ、体力の向上や協調性といった運動・スポーツのねらいを持っていると言える。しかし、創造力を養うことや、「する」こと以外のねらいは持っていない。

保健体育（体育実技）の授業の充実を考えると、教員の運動・スポーツへの意識変化が求められる。

b 保健体育授業の「ねらい」の捉え方の変化

検証授業を実施した藤沢養護学校高等部2学年全教員を対象に事前及び事後アンケートにより、保健体育（体育実技）授業の「ねらい」の捉え方にどのような変化が生じたかを調査した。

表3-6 事前・事後アンケートの標本人数（単位：人）

	第2学年
在籍	15
事前アンケート回答者数	14
事後アンケート回答者数	14

事前・事後アンケート

「現在、御自身が行っている（かかわっている）『保健体育（体育実技）』はどのような授業であると思いますか。」

【態度】

(a) 友達と協力する態度（協調性）を身につけさせる

<結果>

事前アンケートでは、全体の79%（11人）が「友達と協力する態度（協調性）を身につけさせる」ことに肯定的な回答を示し、事後アンケートにおいては86%（12人）が同じく肯定的な回答を示した。

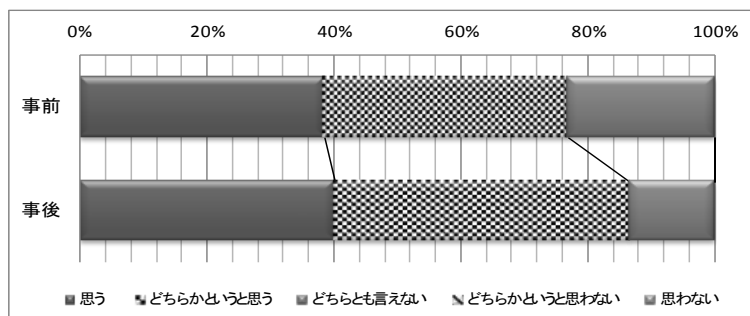


図3-15 友達と協力する態度（協調性）を身につけさせる（n=14）

(b) 人のために行動できるようにする

<結果>

事前アンケートでは、全体の57% (8人)が「人のために行動できるようにする」ことに肯定的な回答を示し、事後アンケートにおいては93% (13人)が同じく肯定的な回答を示した。

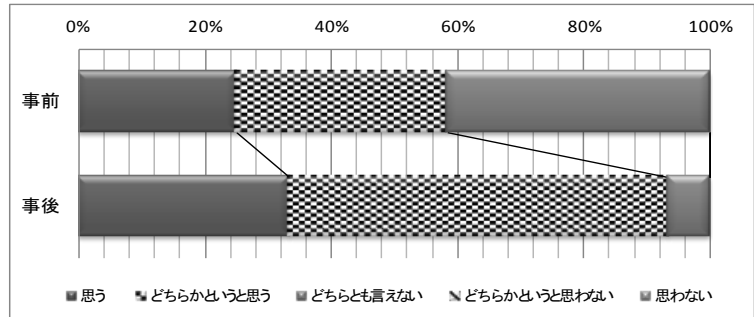


図3-16 人のために行動できるようにする (n=14)

(c) コミュニケーション能力を身につけさせる

<結果>

事前アンケートでは、全体の79% (11人)が「コミュニケーション能力を身につけさせる」ことに肯定的な回答を示し、事後アンケートにおいては93% (13人)が同じく肯定的な回答を示した。

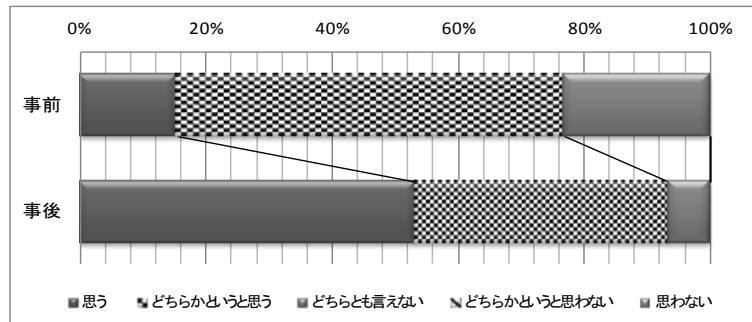


図3-17 コミュニケーション能力を身につけさせる (n=14)

(d) マナーを身につけ、他者へ配慮できるようにする

<結果>

事前アンケートでは、全体の64% (9人)が「マナーを身につけ、他者へ配慮できるようにする」ことに肯定的な回答を示し、事後アンケートにおいては93% (13人)が同じく肯定的な回答を示した。

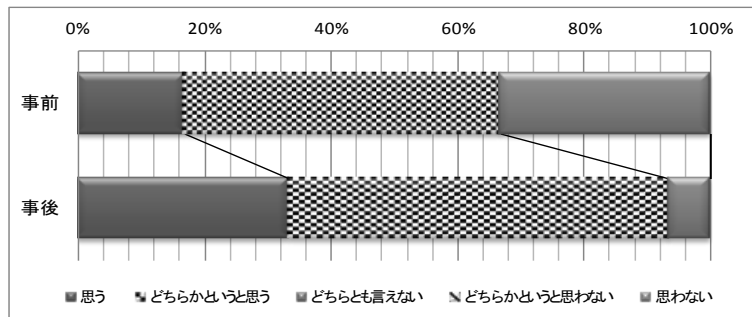


図3-18 マナーを身につけ、他者へ配慮できるようにする (n=14)

(e) スポーツ・運動への興味・関心を広げる

<結果>

事前アンケートでは、全体の93%（13人）が「スポーツ・運動への興味・関心を広げる」ことに肯定的な回答を示し、事後アンケートにおいては100%（14人）が同じく肯定的な回答を示した。

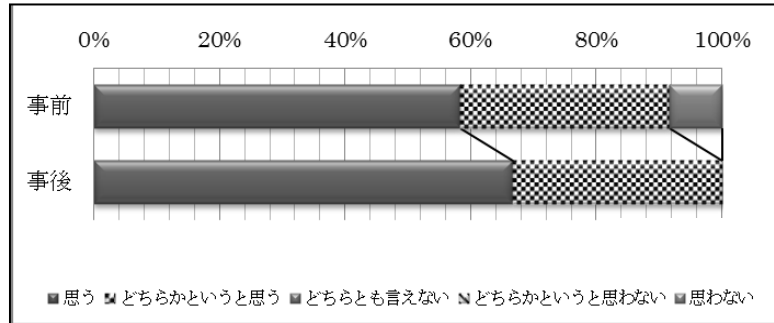


図3-19 スポーツ・運動への興味・関心を広げる (n=14)

【技能】

(a) 体力を向上させる

<結果>

事前アンケートでは、全体の86%（12人）が「体力を向上させる」ことに肯定的な回答を示し、事後アンケートにおいては93%（13人）が同じく肯定的な回答を示した。

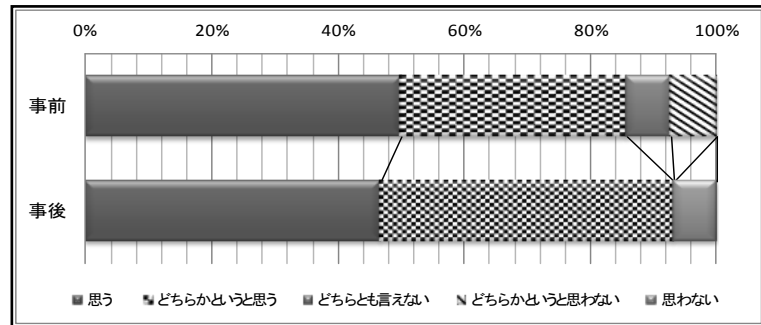


図3-20 体力を向上させる (n=14)

(b) 運動の個人技能を高める

<結果>

事前アンケートでは、全体の93%（13人）が「運動の個人技能を高める」ことに肯定的な回答を示し、事後アンケートにおいては64%（9人）が同じく肯定的な回答を示した。

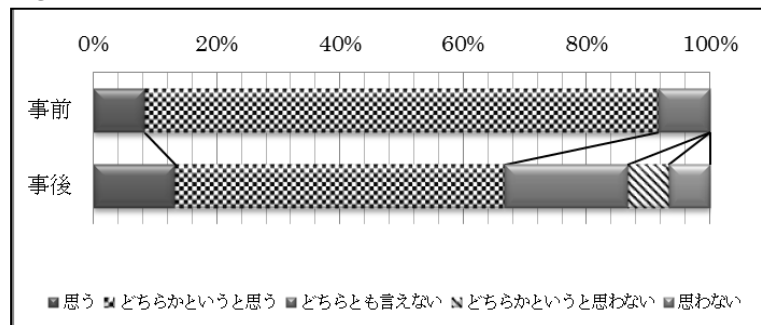


図3-21 運動の個人技能を高める (n=14)

(c) 運動の集団技能を高める

<結果>

事前アンケートでは、全体の64%（9人）が「集団技能を高める」ことに肯定的な回答を示し、事後アンケートにおいては79%（11人）が同じく肯定的な回答を示した。

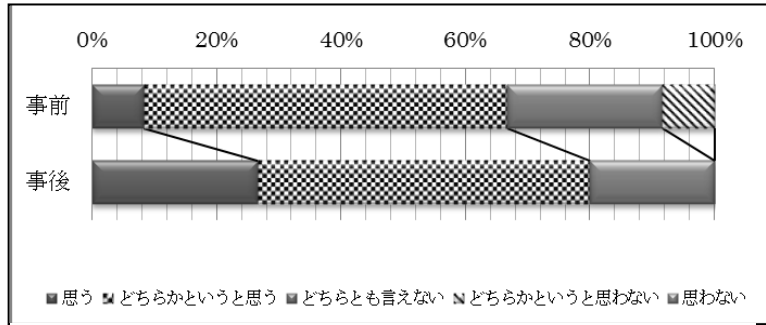


図3-22 運動の集団技能を高める (n=14)

【知識、思考・判断】

(a) 気分転換、息抜きの必要性を感じさせる

<結果>

事前アンケートでは、全体の64%（9人）が「気分転換、息抜きの必要性を感じさせる」ことに肯定的な回答を示し、事後アンケートにおいては71%（10人）が同じく肯定的な回答を示した。

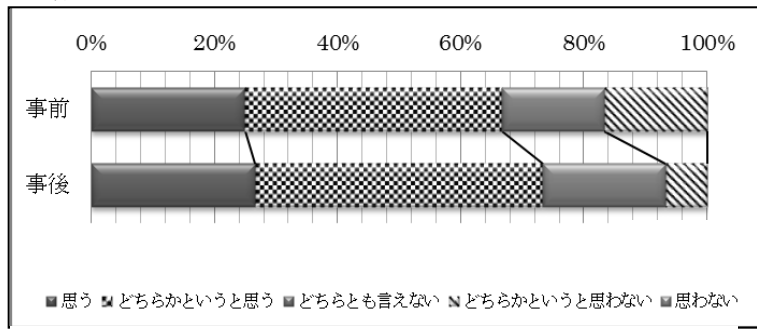


図3-23 気分転換、息抜きの必要性を感じさせる (n=14)

(b) スポーツを「する」ことの楽しさを分からせる

<結果>

事前アンケートでは、全体の86%（12人）が「スポーツを『する』ことの楽しさを分からせる」ことに肯定的な回答を示し、事後アンケートにおいては93%（13人）が同じく肯定的な回答を示した。

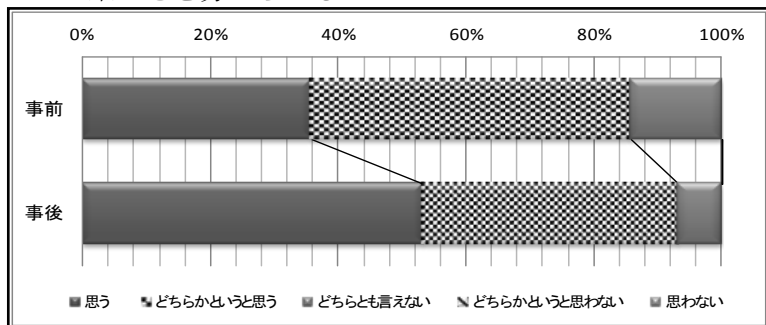


図3-24 スポーツを「する」ことの楽しさを分からせる (n=14)

(c) 問題解決能力を身につけさせる

<結果>

事前アンケートでは、全体の50% (7人) が「問題解決能力を身につけさせる」ことに對し、肯定的な回答を示し、事後アンケートにおいては71% (10人) が同じく肯定的な回答を示した。

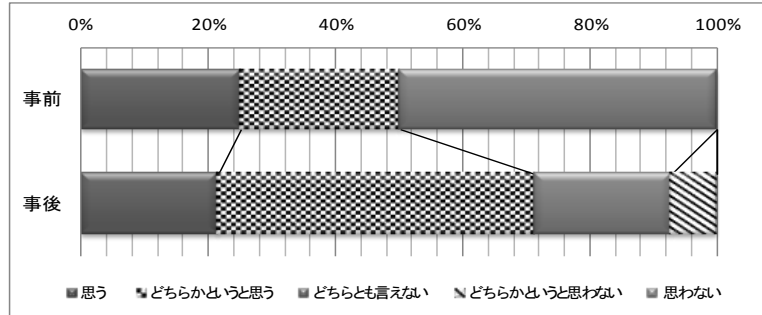


図3-25 問題解決能力を身につけさせる (n=14)

<考察>

これらの結果から、人間関係形成能力にかかわる設問 (a) ~ (d) について事後アンケートで肯定的な回答をした教員が増えたことにより、多くの教員が保健体育 (体育実技) の授業が体力の向上のみを目的にするのではなく、人間関係形成能力の育成についても十分にその効果があり、それを実感できたと言える。

学年集団全員で同じ空間で同じ学習活動に取り組むことは、「態度」面については、それぞれの個性を尊重しながら協力し合う様子が見られ、十分にその目標が達成できると考える。また、「技能」面については、体力や集団技能が向上したことはみとれたが、個人の技能についての、向上はみとれなかった。生徒同士で協力したゲームを体験することをねらいとし、生徒たちがスポーツの楽しさを味わう授業内容であったためであると考え。「知識、思考・判断」面は、スポーツをする楽しさを体験し、運動にかかわる問題解決能力や実践力の向上にも効果があったと考える。

こうしたことから、学年集団全員で同じ空間で同じ学習活動に取り組むことは、人間関係形成能力はもとより、個人の技能を除いた体育の4観点において教員側は効果があると感じていることがみとれた。

(2) コミュニケーションを必要とする技能の向上

【コミュニケーションを必要とするパスの技能の成功率は高まったか】

球技において、最もコミュニケーションを必要とする技能は「パス」であると考え、そのパスの技能が、検証授業で取り組んだゴール型「進撃のパスパス」において、第4時の『試しのゲーム』と第8時の『最終ゲーム』での一定時間内の総数と成功本数をそれぞれ比較した。

表3-7 4時間目と8時間目におけるチームごとのパスの総数と成功本数 (単位: 本)

	4時間目							8時間目						
	パス			パスミス	パス総数	成功本数	ゴール数	パス			パスミス	パス総数	成功本数	ゴール数
	声出し		働きかけ (B→A)					声出し		働きかけ (B→A)				
	反応○	反応なし						反応○	反応なし					
赤	20	4	14	14	52	38	8	25	0	19	7	51	44	13
青	19	3	13	13	48	35	9	25	1	20	7	53	46	12
黄	19	6	15	15	55	40	11	26	0	18	9	53	44	10
白	20	5	9	15	49	34	7	28	0	28	10	66	56	11
緑	16	6	8	13	43	30	8	28	2	17	10	57	47	13
合計	94	24	59	70	247	177	43	132	3	102	43	280	237	59

<結果>

図3-27は、4時間目の『試しのゲーム』と8時間目の『最終ゲーム』での一定時間内のパス総数と成功本数をそれぞれ比較したグラフである。

パスの総数では33本の増加、成功本数では60本の増加が見られた。また、チームごとの集計を示した表3-7を見てみても、総数の増加が見られなかったチームも含め、すべてのチームで成功本数の増加が見られた。

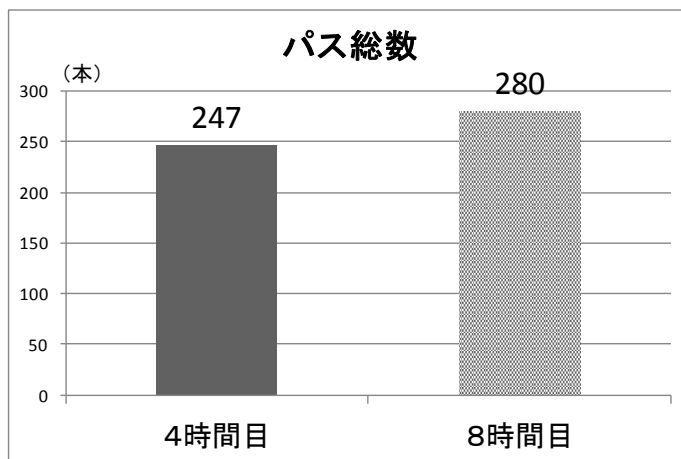


図3-26 4時間目と8時間目におけるパスの総数比較

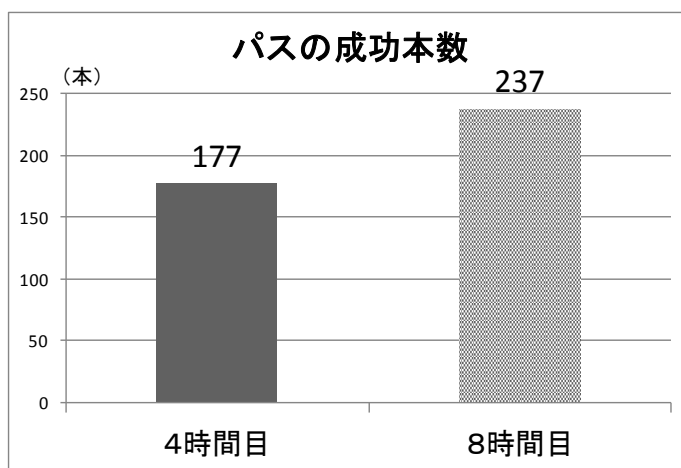


図3-27 4時間目と8時間目におけるパスの成功本数

<考察>

これらの結果から、すべてのチームのパスの技能が向上したと言える。

当初は、相手の状況を確認せず、相手の方向にボールを投げている場面が見られたが、相手の名前を呼び、さらにはその反応を待つことができるようになったことから、成功本数が増加したと考える。

ソフトバレーボールを使用したことから、パスの出し方・受け方といった具体的な技術指導はしなかったが、相手への思いやりを大切にするにより、適切なパスの出し方・受け方ができるようになっていったことが考えられた。

球技でのパスを指導する初期の段階の練習として有効であり、よりゲームに有効なパスを指導する段階となってから、具体的に技術指導をすることが妥当であると考えられる。

【Bグループの生徒からAグループの生徒への働きかけによって生じたパスの成功本数】

<結果>

図3-28は、4時間目の『試しのゲーム』と8時間目の『最終ゲーム』での一定時間内のBグループの生徒からAグループの生徒への働きかけによって生じたパスの成功本数を比較したグラフである。

働きかけによるパスの成功本数は、81本増加している。また、8時間目のパスの成功本数のうち

237本のうち、234本が働きかけによる成功であった。

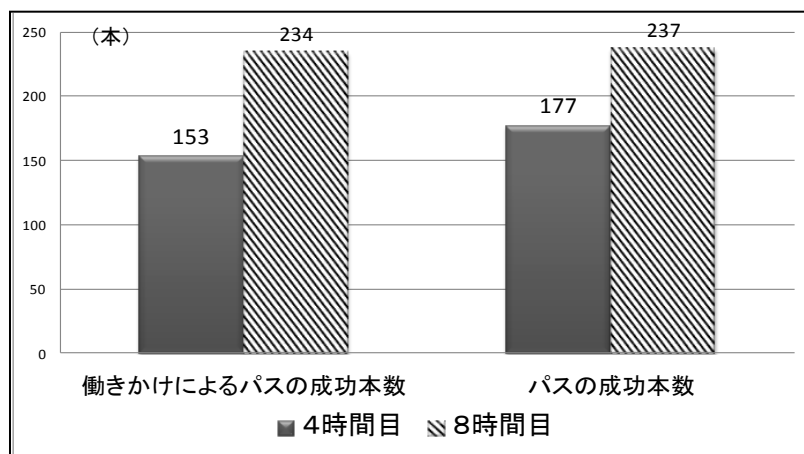


図3-28 4時間目と8時間目におけるBグループの生徒からAグループの生徒への働きかけによって生じたパスの成功本数の比較

<考察>

これらの結果から、パスが成功するためには、Bグループの生徒が、Aグループの生徒に対し、どこまで思いやりを持ってパスを出せるかということが重要であり、Bグループの生徒の技能・態度の向上が、チームの技能向上に大きくかかわっていると考える。

5 学習指導の工夫とその効果及び課題

教材・教具	効果及び課題
<p>各グループのねらいと S S T (S S G)</p>	<p>ねらいを2つに分け、それぞれのねらいを踏まえながら、S S T及びS S Gを設定したことは、それぞれの実態に即していたため有効であった。</p> <p>また、体育の授業場面と生活場面との関連については、ねらいを明確にすることで、生徒にそれぞれの場面をイメージさせるのに有効であった。</p> <p>さらに、授業略案にねらいや指導したいことを目立つように掲示することは、教員間で共通理解が図られ、スムーズに展開することに有効であった。</p>
<p>ねらい① ＜Aグループ＞ どんなことをやるか知ることができるようになる ＜Bグループ＞ 単元の見通しを持つことができるようになる ＜S S T＞ 挨拶をしなかったら ＜S S G＞ 【ドーンじゃんけん】</p>	<p>普段、見通しを持つことが苦手な生徒もいるが、ゲームを通して学習することで、多くの生徒が、次回からの授業の流れをつかむのに有効であった。</p> <p>学年全員で学習することで、生徒は、他の生徒の特性を感じる機会となり、今後の活動の1つの見通しを持たせるのに有効であった。</p> <p>会場が体育館であったため、活動量が不十分であった。今回のゲーム内容では、グラウンドで実施した方が活動量は確保できると思われる。</p>
<p>ねらい② ＜Aグループ＞ 名前を呼ばれたら反応できるようにする ＜Bグループ＞ 仲間の名前を呼んで反応を待つことができるようになる ＜S S T 教示＞ 名前を呼ばないと ＜S S G＞【ネームパス】</p>	<p>Aグループの生徒は、名前を呼ばれて返事することは難しいようであったが、ほとんどの生徒がボールを受けるための合図（手を出す）をすることはできており、名前を呼ばれたら反応するということを学ぶのに有効であった。</p> <p>Bグループの生徒は、名前を呼んだ後、相手の反応を待つ必要性など、Aグループの生徒とのかかわりのきっかけを知るのに有効であった。</p> <p>活動の初期の段階では、教員の手助けがないと活動が成立しないことがあった。原因は説明が不明瞭であったことと思われる。生徒がより具体的にイメージしやすい説明を行う必要があると思われる。</p>
<p>ねらい③ ＜Aグループ＞ 仲間と動きを合わせることができるようになる。 ＜Bグループ＞ 仲間の特性を知り、リードすることができるようになる。 ＜S S T＞ 一緒に動かないと仲間のことを考えないと ＜S S G＞【フープ de 玉入れ】</p>	<p>Aグループの生徒は、一つのフープに入って活動することで、仲間を感じながら活動することを学ぶのに有効であった。</p> <p>Bグループの生徒は、一つのフープの中で、自分の意思だけでは動くことができないという体験を通して、仲間の特性を知り、仲間の動きを感じながら活動することを学ぶのに有効であった。</p> <p>初めて実施した活動であったため、説明が伝えやすく、生徒同士が周りの動きを確認しやすい体育館で実施したが、さらに難易度を上げるためにはグラウンドで活動した方が良いと思われる。</p>

教材・教具	効果及び課題
<p>ねらい④ <Aグループ> やさしく相手に触れることができるようにする <Bグループ> 相手の気持ちを考え、やさしく相手に触れることができるようにする <SST>強く叩くと相手の気持ちを考えないと <SSG>【タッチリレー】</p>	<p>スポーツを行う際、それに伴う身体接触で気を付けることを簡単な活動を通して経験することにより、具体的な力の加減を学ぶのに有効であった。</p> <p>チーム対抗での競争を実施したために、当初、痛くても勝てればその痛みを忘れてしまうといった状況が見られた。競争をする前に、力の加減を確認する活動を取り入れてから、実施する必要があると思われる。</p>
<p>ねらい⑤ <全体> 仲間とコミュニケーションをとりながら楽しむことができるようにする <SST・般化> 最終ゲーム（進撃のパスパス）</p>	<p>今までSSTやSSGを通して学んだことが直接生かせるような最終ゲームを考案したことは、生徒たちにとっては容易に今までの活動を思い出し、取り組める活動として有効であった。また、仲間とコミュニケーションをとらないと成立しないゲームであったために、普段かかわりの少ない生徒同士のかかわりも見られ、人間関係形成能力の面から態度の育成に有効であった。</p> <p>さらに、主な技能を「パス」に限定したことで、ねらいが明確になり、積極的に仲間とコミュニケーションをとってパスの技能が向上していく様子が見られ、技能の面においても有効であったと思われる。</p> <p>「守備」側の指導を行わなかったために、Bグループの生徒を意図的に指名し、組み合わせたことで、その生徒たちが相手の生徒の特性に配慮することでゲームが成立している場面が見られ、勝敗の公平さには欠けてしまった。今回の学習のねらいとしては有効と考えるが、「勝敗を認める態度」をねらいとした場合には改善が必要である。</p>
<p>ペアラジオ体操</p>	<p>ペアラジオ体操は、相手の様子や状態を感じながら息を合わせて動くということを学習するのに大変効果があった。</p> <p>また、主にAグループとBグループの生徒で意図的にペアを組み合わせたことで、お互いの特性を知り、認め合い、活動しようとする心への働きかけに有効であった。</p> <p>ペアで実施することにより、慣れてくるとふざけてしまい、動きがいい加減になってしまう場面が見られた。毎回、取り組む前にペアラジオ体操のねらいを明確にしてから実施する必要があると思われる。</p>

教材・教具	効果及び課題
学習カード（チームカード）	<p>チームカードにすることで、チームで話し合いながら記入することを通して、言語活動の充実を図るのに有効であった。</p> <p>また、自分を上手く表現できない仲間に対し、どのようにしたらその仲間の気持ちや思いを聞き出すかということを経験することにより、他者理解の方法を学ぶのに有効であった。</p> <p>授業終了前に記入することで、常に終了の時間を気にしながらの活動になってしまい、じっくりと取り組ませることが難しく、記入の状況を予測した時間配分が必要であると思われる。</p> <p>また、教員のかかわり方によって、時間を費やしてしまった場面もあり、記入のさせ方についての共通理解の充実が必要であった。</p>
全体進行表	<p>終了した活動を記した紙をはがしていくことで、活動の進行状況を生徒が理解するのに有効であった。</p> <p>準備に時間をかけることができず、字のみの表示になってしまったが、かえって生徒にとっては別のものに気をとられず活動に集中できるものであった。</p>
掲示	<p>ポイントを視覚的に示すことで、常にねらいを意識して活動させることに有効であった。</p> <p>また、その際、文章はできるだけ簡潔に書いた方が、有効であった。</p> <p>表示する紙の色や文字の色を、指導する内容によって統一し、徹底することで、生徒の中で分類しやすいものにする必要がある。</p>
ソフトバレーボール	<p>当たっても、痛さがないため、ボールへの恐怖心が生まれず、全員が前向きに活動に参加するのに有効であった。</p> <p>また、ボールの大きさが大きいことで、ボール操作がしやすく、ボールを捕ることを容易にしていた。</p> <p>なお、弾みやすいため、バウンドしたボールの操作が難しく、苦勞している場面が見られ、空気を少し抜いて対応する必要があると思われる。</p> <p>ある程度のボール数が必要であったため、すべて同じ規格のボールを準備することができなかった。ボールに慣れるためにも、同じ規格のボールを準備する必要があると思われる。</p>
三角コーンとコーンバー	<p>三次元的に制限区域を示すことで、目線を落とさず活動でき、前方への視野が保証され、スムーズに活動することに有効であった。</p> <p>安全面への配慮から、破損しやすい作りになっているため、途中破損する可能性がある。</p>

教材・教具	効果および課題
ゼッケン	<p>ペアラジオ体操用とゲーム用と使い分けることに、当初はその手間と時間が懸念されたが、それぞれの活動の切り替えの合図となり有効であった。</p> <p>また、自分の着ているゼッケンの色が何を示しているのかが明確であったために混乱することがなく、それぞれの活動をスムーズに進めるために大いに役に立った。</p> <p>活動によって、着替えが必要となり、慣れるまでは、生徒のみでの着替えは混乱が生じてしまう可能性がある。</p>
授業略案	<p>フロー図を一目見れば、各教員が全体の中で、どのような役割で、具体的にどのように動くのかが明確になっていたため、それを基に打合せを行わなくても、ほとんどの教員は実際の授業に効果的にかかわることができ、有効であった。</p> <p>I C Tを活用しフロー図を容易に作成できるシステムを構築していく必要がある。</p> <p>また、綿密な打合せが必要な部分については、要点を整理して個別に短時間で打合せを行えるよう工夫する必要がある。</p>
チーム編成について	<p>クラスをチームとして編成することで、比較的仲間の特性をつかみ易く、スムーズに活動するのに有効であった。</p> <p>また、今回の体育を通して学んだ仲間同士のつながりが、体育の授業に留まらず、普段の活動にも有効であった。</p> <p>さらなる人間関係形成能力の育成を目指していくためには、特定の仲間とだけではなく、クラスの枠を超えたチーム編成も、必要になってくる場面もあると思われる。</p>

6 その他

事後アンケートにより、検証授業後、仲間とのかかわりなどで生徒の変容があったかどうか調査した結果、授業以外の日常生活における記述について、次のとおり記した。

表 3-8 事後アンケート 検証授業後の生徒の変容（自由記述）

自由記述(抜粋)
<p>日直以外ほとんど名前を呼ばない生徒が友達の名前を呼びながらパスができた。</p>
<p>Bグループの生徒から、Aグループの生徒への関わりがクラスの中で増えた。また関わりが高圧的、威圧的な生徒、抵抗感のある生徒もいたが、優しく言葉かけができる場面が今回の授業から増えた。もともと人間関係、ソーシャルスキルに課題がある生徒が、Aグループの生徒にどうして良いかわからないことが原因とされていたが、ヒントになった印象がある。他クラスの苦手な生徒と実習になり、どうなるか心配していたが、今回の授業がヒントとなったからか、「協力して行う作業があるから、いないと困る」という発言があった。以前は高圧的な態度や言動をしている場面を注意していたので、関わりの変化だと言える。</p>
<p>Aグループの生徒に対して、苦手意識があり、自分から話しかけることがほとんどない or 強い口調になってしまうことが課題の生徒が日常場面でAグループの生徒の名前を優しく呼び、誘導するようになった。</p>

第4章 研究のまとめ

1 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

本研究において、SSTを活用した体育の授業の検証を通して、人間関係形成能力に着目した集団的スポーツを学ぶ体育授業をつくることを目的に研究を進めてきた。

その結果、次のことが明らかになった。

球技：ゴール型の授業において、個々の人間関係形成能力の課題を踏まえ、SSTを活用した授業及び役割分担を明確にしたゲームを展開することで、学年集団全員で同じ種目と同じ空間で行うことが可能となり、友達と協力して運動する態度やコミュニケーションを必要とする技能を養うことができる。

そして、本研究の分析の視点である「人間関係形成能力の育成」と「コミュニケーションを必要とする技能の向上」から、特別支援学校高等部2年生の球技：ゴール型の授業について、研究の成果、今後の課題及び今後の展望について述べる。（表4—1）

表4—1 研究の成果

		成 果
人間関係形成能力の育成について	生徒の人間関係形成能力は育成されたか	個々の人間関係形成能力の課題を踏まえ、SSTを活用した授業及び役割分担を明確にしたゲームを展開することは人間関係形成能力の育成に有効に働いた。
	人間関係形成能力の育成に関する教員の意識は変化したか	SSTを授業の柱として態度中心のねらいを持ち、学年集団全体で同じ空間で同じ学習活動に取り組むことにより、生徒たちの人間関係形成能力の育成に有効に働き、教員の意識にも変化がみられた。
必要とするパスの技能の向上	コミュニケーションを必要とするパスの技能の成功率は高まったか	SSTを取り入れた授業をつくり、Bグループの生徒にAグループの生徒をサポートすることを指導していくこと、相手への思いやりを大切にすることを指導していくことは、コミュニケーションを必要とする技能（パス）の成功率を高めることができた。

表4—2 特に成果が見られた教材・教具

	成 果
「ペアラジオ体操」	ペアを固定して行うことで、友達を知り、互いに助け合っていた。各関節の可動域を広げる身体的な準備運動だけでなく、「友達と協力する」ことを教える心の準備運動にもなった。
「進撃のパスパス」 (知識・技能面)	S S Gで行ったことをステップアップさせていくことにより、最終ゲーム(進撃のパスパス)のルールを覚えることができた。
	攻撃者が進む方向を一定方向にすることにより、一人一人がルールを理解し、仲間同士で声をかけ合う場面が生まれた。また、動き方のわかりやすさから、生徒が入り乱れているにもかかわらず、動きを理解していた。
	学年全体で、「友達と協力して」行い、人間関係形成能力を高める手立てとして講じたが、コミュニケーションを必要とする「技能」も高めることができた。

(2) 今後の課題

ア 実態把握の重要性

本研究では、「個別指導計画」「個別のプロフィール」「社会性のアセスメント」から実態把握を行った。しかし、「アセスメント」の実施について、生徒の実態の幅が大きく、複雑であるため、検査を選択することが非常に難しい。本研究においては、2種類の検査を活用しているが、それも同じ尺度のものではないため、生徒の実態すべてを測りきれものではない。正確な実態把握ができれば、適切なねらいをもって授業を行うことができる。対象となる生徒の実態を正確に把握できるよう、既存のアセスメントを組み合わせたりして、最適な検査を行う必要がある。

イ 1年間、3年間を見通した単元計画

本研究を通して、人間関係形成能力を高めるために、態度に着目する視点を持って、授業の展開を考えることも必要だと改めて認識した。ただし、今回の授業において、Bグループの生徒の中でも人間関係形成能力と運動能力が高い生徒については、物足りなさが残ったことは否定できない。人間関係形成能力と運動能力が高い生徒に関しては、仲間や時には相手チームのことさえも気を遣って授業に取り組む様子が見られた。その生徒たちによる協力がなければ、学年集団全体が「楽しんで」ゲームを行うことは難しかったのかもしれない。ゲーム中の役割分担の工夫、改善が必要であると考え。このようなことから、1年間の中で、態度の視点を持って行う単元もあれば、グループに分かれて、思い切り体を動かすような単元を取り扱うことが必要だと考える。これを踏まえて3年間を見通した単元計画を立てて、各学年の指導内容をバランスよく決定していく必要がある。

2 今後の展望

(1) SSTについて

特別支援学校では、SSTを活用した授業が、各教科や領域で展開されており、それが日常生活における対人関係の行動と結びついている。体育の授業においても、態度面の指導に着目し、生徒同士のコミュニケーション能力と人間関係形成能力の向上を図る展開が求められる。

また、SSTにより、トラブルが起こりやすい場面を抽出し、その防止策について、具体的な体験を通して学んだことは、集団でのゲームの場面には活用し易く、今回の授業においては大変有効であった。

今後は、SSTの説明内容を事前にしっかりと精選し、時間を有効に活用するとともに、動画を用いたりする等、更なる工夫が必要であると思われる。

(2) ゴール型簡易型ゲーム「進撃のパスパス」について

本研究では、生徒たちの実態を踏まえ、「進撃のパスパス」というオリジナルのゲームを考案した。「友達と協力する」という態度の学習として行った今回の検証授業においては大変有効であった。当初、オリジナルであるがために、サポートする教員の多くに戸惑いが見られた。「球技＝既存の種目」と考えるのではなく、生徒の実態に合わせゲームを構築することにより、学習の効果を高めることを可能にすると思われる。特定の種目の習得に目を向けるのではなく、スポーツ・運動をすること自体が楽しいと感じることができるような体育授業をつくりあげていくことが大切であると考えられる。

3 最後に

今回の研究を通して、自分自身が改めて学んだことは、生徒がより多くの仲間とかかわり合うことの重要性である。

学年集団全員での体育授業で、生徒たちに友達と協力することを教えるために様々な手立てを講じてきたが、教員向けの事後アンケートや教員との会話において、「クラスの中でのかかわりが増えた」や「高圧的、威圧的な生徒、抵抗感のある生徒もいたが、優しく言葉かけができる場面が今回の授業から増えた。」、「苦手な生徒とも協力して仕事ができた」などの記述があったことは、今回の授業の効果を一番実感した瞬間であった。

また、オリジナルとしてつくった「進撃のパスパス」に取り組んだ後、へとへとに疲れて体育館に寝転ぶ生徒たちを見た時には、体育の授業としての運動量の確保ができていたことがわかった。ただそれもまた、普段の体育ではここまで動いていなかった生徒も一緒になって寝転んだのは、仲間と一緒に「動いた」からであると思われる。

授業を始める前に、互いに衝突していた生徒たちや、かかわり合うことが少なかった生徒たちが、学年集団全員で楽しめるゲームを用意し、教員が態度を意識させることにより、生徒たちは体育授業にのめりこみ、仲間とかかわり合うことが増え、「楽しさ」が実感でき、集団技能も高まっていくのだと改めて感じることもできた。

ただし、生徒の人間関係形成能力を高めていくことができるのは、体育の授業だけではない。ただ、特別支援学校の教員として、生徒の卒業後を見据え、卒業した後のために今何を身に付けさせるべきなのか、常に生徒たちを観察し、生徒たちに必要な指導内容を把握し、実態に応じた手立てを工夫していくことが重要である。今回の研究の成果と課題を心に留め、体育授業に限らず、学級指導や日常生活においても、生徒を支援し、学びや意欲を喚起できる授業展開を行っていきたいと考える。

最後になりましたが、本研究を行うに当たり、大変お忙しい中、検証授業にたくさんの協力をいただいた藤沢養護学校の佐藤校長をはじめ、高等部2学年、高等部の他学年、その他の教職員の皆様に深く感謝申し上げます。

また、専門的な見地から様々な指導、助言をいただいた、神奈川県教育委員会教育局指導部保健体育課、神奈川県立体育センターの指導主事等に深く感謝申し上げます。そして、検証授業にあたり、いつも前向きに、元気に取り組んでくれた藤沢養護学校高等部2年生の生徒の皆さん、また協力してくださった保護者の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

【引用文献・参考文献】

- 1 「平成 20 年度障害者雇用実態調査結果 再集計」厚生労働省障害者雇用対策課 平成 20 年
- 2 中嶋学「知的障害者の離職から再就職についての一研究」
- 3 「知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の推進」 東京都教育委員会 2009 年 3 月
- 4 「特別支援教育ソフト 子どものためのソーシャルスキルトレーニング『君ならどうする』」
<http://www.sstsoft.com/> (2015.08.01 アクセス)
- 5 居村恵子「ソーシャルの育成と指導の実際～知的障害養護学校高等部生の就労支援に向けて～」
2007 年年 3 月
- 6 渡邊貴裕、橋本創一、菅野敦、中村勝二「特別支援学校における体育の教育課程に関する調査
研究」2007 年
- 7 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」
2011 年 1 月 31 日
- 8 『高等学校キャリア教育の手引き』「キャリア教育とは何か」 文部科学省 2011 年 11 月
- 9 文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説総則編（高等部）』海文堂出版 平成 21 年 12 月
25 日
- 10 文部科学省『学校体育実技指導資料第 8 集 ゲーム及びボール運動』東洋館出版社 2008 年 9 月
- 11 『知的障害、発達障害、精神障害のある方とのコミュニケーションハンドブック』 国土交通
省総合政策局安心生活政策課 2009 年 6 月
- 12 国立特別支援教育総合研究所「小・中学校等における発達障害のある子どもへの教科教育等
の支援に関する研究」2010 年 3 月
- 13 吉田久『体育科教育』大修館書店 2014 年 02 月版 P14
- 14 『ソーシャルスキルトレーニングの理解と指導』 岩手県総合教育センター
- 15 上野一彦、岡田智『ソーシャルスキルマニュアル』明治図書出版 2015 年 7 月 21 版刊
- 16 金彦志ら「発達障害児における社会的相互作用に関する研究動向—学童期の仲間関係を中心に
—」東北大学大学院教育学研究科研究年報 第 53 集・第 2 号 2005 年
- 17 『楽しい体育の授業』 明治図書出版 2012 年 8 月号
- 18 『楽しい体育の授業』 明治図書出版 2014 年 2 月号
- 19 『楽しい体育の授業』 明治図書出版 2013 年 2 月号
- 20 『「社会性の基礎」を育む「交流活動」・「体験活動」 —「人とかかわる喜び」をもつ児童
生徒に—』国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2004 年 3 月
- 21 加地信幸「知的障害のある児童生徒のコミュニケーションの力を育む指導の工夫—コミュニケ
ーションの基礎的能力に係る評価シートの作成を通して—」 2013 年
- 22 茨城県教育研修センター、研究報告書『特殊教育諸学校におけるティーム・ティーチングの在
り方』、茨城県教育研修センター
- 23 長谷川裕己「特別支援学校（知的障害）におけるティーム・ティーチングによる授業改善の試
み：『ティーム・ティーチングでの指導・支援の内容』表を活用した授業実践を通して」、静
岡大学教育実践総合センター紀要 pp. 83-92
- 24 長沼俊夫「チームティーチングによる授業づくり『現状と課題』（肢体不自由教育, 170）」2005 年